脇役の分際　ぷらす。

猫田　蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役の分際　ぷらす。

【Ｎコード】

Ｎ３４２０Ｒ

【作者名】

猫田　蘭

【あらすじ】

『フェザー文庫』（発行：林檎プロモーション）で書籍化する「脇役の分際」の、番外編および拍手お礼を改稿、追加したものを載せていきます。

＊警告タグ「Ｒ１５」解除しました。「ＰＧ１２」は、要するに「小学生の皆さんは保護者の方に許可をいただいてね」の意味です。

巫女姫（偽）の溜息（拍手お礼短編修正版４＋追加１）（前書き）

二月中の拍手お礼の改稿＋１編です。

巫女姫（偽）の溜息（拍手お礼短編修正版４＋追加１）

溜息のいち。

王宮の廊下を足早に歩く青年の姿があった。
まるで後から追いすがってくる小さな足音から逃れるように、急いている。
「カイト！　カイト、お待ちなさい！」
とうとう痺れを切らした足音の主が声をかけると、青年はため息を一つついて歩みを止めた。
「カイト！　何故わたくしとの結婚を断ったの！」
「ルビア姫……」
青年は困ったように微笑んだ。

「わたくしとも、レミアお姉さまとも、リリアとも結婚しないなんて。この国の何が不満なの？」
姫君は花のかんばせを真っ赤に染めて、心底信じられないというように青年をなじった。
「不満があるわけではないのです。ただ、オレには心に決めた人が……」
「な、なんですって！　一体どこの娘ですか！」
この国に、国王の娘達のお気に入りである青年に近付く女の影など無かったはず。
ルビアは己のうかつさに地団太を踏みたい気分であった。

「オレの、元々の世界の子です。学校で、色々相談にのってもらっていて。見た目は小さくて可愛いのに気が強くて、でもそれを必死に隠そうとしているところがまた可愛いんです。」
「ガッコウ……」

ガッコウ、というのは確か、同じ年頃の子供達が集う学び舎のことだっただろうか。
カイトの世界にはこの国にないものがたくさんある。
彼の知識や、行動によって、この国は少しずつ良い方向に変わってきた。そしてこれからも。
自分こそがその隣に立つのだと思っていたのに。少なくとも、姉妹の誰かが選ばれると、信じていたのに。その目には自分が映っていると、確かに感じたこともあったのに。
いつの間に、心が離れてしまったのだろう。
「その娘が、わたくしたちよりも大事なの？」
「……オレにとっては」
姫君は唇をかみ締めた。

「そう、ならばわたくしたちが見極めてあげる。その娘があなたにふさわしいかどうか。連れてきなさい！」
そして、くるりと振り向いて立ち去っていった。
こういう時に泣き顔を見せるのは、ずるい事だと思った。

……と、いう、夢をみたわけだが。
目を覚ましてから冷や汗をかいた。なんだ、あれ。悲恋モノのドラマか。キャストが知り合いだとなんだか居心地悪いな。
ところで、小さくて可愛くて気が強いのを隠している、相談にのってくれる子って私じゃないかね？　（自分でいうか）

いや、これはただの夢だから、この場合私の願望が痛々しいというだけだ。それはそれで辛いものがあるけど。いや、しかし、それでも、夢で済むならそれで構わない。

～とある王宮の朝食の風景～

「どうしたの、盛沢さん？　オレの顔に何かついてる？」
「う、ううん、今日もカッコイイな～って思って」
「そう？　盛沢さんも可愛いよ」
なんだこの新婚さんみたいな会話。まぁ私のとっさの答え方が悪かったんだけど。
会長は、ふ、と優しげに微笑んだ。やめてくれ、砂糖吐きそうだ。
「そういえば、オレの相談事、まだ言ってなかったね」
「はぁうあっ？　あ、うん、色々あったものね」
あぶない、パンを落とすところだった。
「……実はね」

正夢かどうか、判明するまであと1分……？

溜息のに。

道場の掃除が終わって戻ってきた旦那様に、私はいつも紅茶を出す。
彼は、本当は緑茶が好きなんだけれど、私がずっと慣れ親しんできたアフタヌーンティーの習慣に、ちゃんと付き合ってくれる。
幸せだなぁ、と思う。特に何が、ってわけでもなくて。ただこの人とこうしていることがたまらなく愛おしい時間なのだ。
最近は、街の剣道道場というのはなかなか経営が苦しくて、だから生活に余裕があるわけではない。絶対苦労するから、と、両親は私がこの家に嫁ぐのを最後まで渋っていた。
けれども、無口だけど本当は優しいこの人と結婚した事を悔いた事はない。

一緒に縁側で寄り添って月を見るのがすき。
実家には無かった畳の上で、じゃれあうのがすき。

朝一番に、ちょっとかすれた声で「おはよう」って起こされるのがすき。
宗太さん、と呼ぶと「ん？」って振り向いてくれるのがすき。
とても、すき。
わたしはいま、とてもしあわせなの……。

と、いう夢を見たわけだが。
んきゃあああああああ、こそばゆいいいいい！
でも、でも萌える、すごく萌える、なにこの胸の高鳴りは。
あぁ、いいなぁ、これは良い。私、帰ったら竜胆君に猛アプローチしようかなぁ。４月に存在を認識してから、なんかいいなぁとは思ってたんだよね。純和風な雰囲気と、切れ長の目もツボだったし。
あと、密かに勉強会のとき、骨ばってて長い指によく萌えてます。
もしかしてこれは恋じゃないかしら！

～とある王宮の朝食の風景～

「おはよう、姫君」
「あ、おはよーございますー（ぽけー）」
「……盛沢さん、なんか機嫌良い？」
「あー、うん、すごく良い夢みたの……（うっとり）」
「……へぇ（なんかおもしろくない気がする）」
「幸せって、案外近くにあったりするのね」
「……どうしたの盛沢さん、嫌な事でもあったの？」
「ううん、わたしはいま、とてもしあわせなの……（はふぅ）」
「そ、そう？　（どうしよう、このこ）」

溜息のさん。

私と彼は、大学は一緒だけれど学部が違う。
お互い束縛するのも好きじゃないから、一々相手のスケジュールを調べたりはしない。だから、タイミング次第でたまにこんな場面にも出くわしてしまう……。
「ねー樹ぃ。今夜うちにおいでよぉ」
「んー、そうだなぁ」
別に異性としゃべるな、とか合コン行くな、なんて言わない。私だって誘われたら行く事もあるし。世界の人口の半分位は異性になるのだから、当然関わらなければ生きてはいけない。そんな独占欲はない。
しかし！　一応彼女という存在（つまり私）がいるのだから、最低限の一線は守れよ！　なんだ、「そうだなぁ」って。そりゃぁ私と付き合ってるのはわざわざ公にはしていないけど、なんとなく私の立場がないじゃないか。私が一方的にあんたを好きで、無理に付き合ってるみたいじゃないか！　許せん！
チャラそうな見た目と全く反しないその性格、今日こそ叩きなおしてくれる。

「福島君、ちょっといいかしら？」
嫉妬というよりは義憤に燃えて、私は他人行儀に声をかけた。この野郎に誠実さという言葉を教え込まねばなるまい。
「あ、クミ……」
あきらかにうげっという顔をするなら可愛げがあるものの、悪戯が見つかった小学生みたいに笑うとは言語道断。
さぁ、どう料理してくれようか、な。

とゆー夢を見た。
不完全燃焼で未だに怒りが解けない。帰ったら後ろからどつきたくなるかもしれない。いや、これは夢だから。私が勝手に彼の人格を歪めているだけで、もしかしたら彼は一途な人かも知れないから。

けれど、あぁ……ムカつく！

～とある王宮の朝食の風景～

「おはよう、盛沢さん」
「……おはよう」
「どうしたの、なんか……機嫌悪い？」
「ものすご～～く腹が立つ夢を見ちゃったの。しかも、夢とは思えなくて」
「あぁ、そういう時って、怒りをどこにぶつけたらいいかわからなくなるよね。オレもたまにあるよ」
「意外。かいちょ……カイト君って、あんまり怒らないイメージだったから」
「そりゃ、オレにだって色々あるよ（遠い目）」
「へ、へぇ（どうしよう、なんかまずい事聞いちゃった？）」

溜息のよん。

「盛沢ぁ、メシくわして～」
ヘロヘロのヨレヨレという状態で中山君がマンションの前に落ちていた。
落ちていたって言うか、行き倒れていた？
「なぁに、またバイトクビになったの？」
「それがさぁ。大型テレビ運んでる時に緊急呼び出しがあって……。落としちゃったんだよなぁ」

未だにケセラン様の呪い（？）から逃げられず、彼は予想通りフリーターになっていた。会社員じゃ、フレックス利用しても追いつかないもんね。

といっても、突然バイト中に消えたり、今回のように高額商品を取り落としたりすることが多いので、悲しいことに長続きしない。
今回は宅配のバイトだったようだけど……。
「なー、早く事務所作って俺を雇って～」
しかし、中山君の一番の問題は、この他力本願さなんじゃないかと最近気付いた。せめて「一緒に店を開こう」とか、そういう考えは出てこないのか。自分はあくまで雇われる立場でいたいのか。責任は全部私にお任せしておきたいのか！
こういうのをもしかしてダメンズとかいうのではないだろうか。

と、大急ぎで食事の支度をしながら思う私はいわゆる「だめんずうぉーかー」認定されちゃうんだろうか……。

って感じの夢を見た。
こわっ。ケセラン様こわっ！　ほんとに将来の中山君はああなっていそうだ。私が面倒をみているかどうかは別として。
あぁ、しかし同情が深すぎるからあんな夢みたのかな？　「可哀想ってのは惚れたってコトさ」っていう名台詞が頭の中をグルグル回る。スポーツ漫画に出てきそうな、歳に不相応なほど童顔の彼はそんなに好みじゃないはずなんだけど。
えー、まさかわたし、ええええ。

～とある王宮の朝食の風景～

「おはよう。……どんな夢見たの？」
「あ、おはようございます。変な顔してます？」
「変っていうか、ものすごく悩んでるように見えるけど」
「ええ、その、自分でも意外な趣向があったのかもしれないと、将来が不安になって」
「……へぇ（将来が不安になる趣向って、一体どんな夢みたんだろ

う）」
「まさかわたしが、あんな、あんな……うぅっ」
「まぁ、人には言えない趣味の一つや二つ、誰にでもあるよ（……ふ）」
「え？　え、えぇ？　（どうしようすごくまずいことをきかされた！）」

溜息のご。

深夜、目が覚めると腹が立つほどお綺麗な顔の男が隣で寝ていた。いわずもがな、私の夫である海人だが。
私は何でこの男と結婚してしまったのだろう。未だに自分でも分からない。顔はすきだった、それだけ。
四六時中顔を突き合わせていると劣等感に苛まれる。なんでもっている、なんでも与えられるひと。優しいのは確かだけれど、真意が見えない。まるで、その名の通り海の底を覗き込むような不安しか返してくれない。
なんだか泣きたくなった。

「眠れない？」
いつから起きていたの、なんて馬鹿な質問だ。彼は気配に聡い。私の視線に気付いたんだろう。
「まだ後悔してるんだ？」
彼は私の葛藤をよく分かっている。なのに逃がしてはくれない。都合が良いから私を選んだくせに、真綿にくるむように甘やかそうとする。
ねぇ、私、あなたといると苦しいの、と言うと、そう？　と私を抱き寄せた。
「大丈夫、なにも難しく考えなくて良いんだよ。全部オレにまかせ

ておけばいい」

そして私は、どんどん逃げ場を失って、この男に絡めとられて行くのだ。

っていうものすごく見ちゃいけない夢をみた。

飛び起きて叫んだね。「いやあああああああっ」て。おかげで護衛の皆様が飛び込んできたけど知ったことか。

ホラー映画よりも怖かったよ！　トラウマものだよ！　ここ最近のよくわからん未来シリーズの夢の中、間違いなくワーストワンだよ。あんな居心地の悪そうな結婚生活するくらいなら一生中山君の面倒見るほうがマシだし、糸の切れた風船（凧よりしっくりくるよね）みたいな福島君と腐れ縁を保つほうがマシだし、ってゆーか竜胆君らぶ？　みたいな！

絶対、絶対に高校だけであいつとは縁を切らねばならない。なんだか今のままだとなし崩し的に「便利」という理由だけで彼女にされてしまう気がする。いいや、確信した。

これはただの夢などではなく本能からの警告なのだと確信した！

～とある王宮の朝食の風景～

「おはよう、今朝はすごい騒ぎだったね」

「……オハヨーゴザイマス」

「あれ、また機嫌悪い？てっきり怖い夢を見たんだろうと思ったんだけど」

「ものすごく、このうえなく、史上最悪の悪夢でした」

「誰かにに追いかけられたとか？」

「追いかけられたどころか、捕まってました」

「……（監禁される夢？）そっか、怖かったね」

「とても、言葉で言い表せないほど恐ろしくて不快な夢でした」

「……ところで、なんで丁寧語で話すの？最近はもうちょっと砕けてくれてたと思うんだけど」
「いいえ、このほうが楽なので！　（必死）」
「……まぁ、そのうちに慣れてね（にこっ）」
「（ぷるぷるぷる）」

婚約者（偽）の日々（拍手お礼修正3＋追加1）

そのいち

会長のお仕事の都合上もうしばらくこちらに滞在する事になって、たいへん暇なので（お姫様達の襲撃を避けるため宰相室で本を読んで過ごしていたのだが、いい加減飽きた）ケセラン様を萌えキャラ化してみることにした。

何故こんなアホなことを考えついたのかというと、やっぱりあの5人戦隊への救済策というか……。ほら、憎たらしいだけの相手のために頑張るのって、モチベーションが上がらないじゃないか。やる気を出せば、もしかしたら戦闘能力も上がるかもしれないし、そうしたらあの「死のサイクル」から逃れられる確立だって・・・・どうかなぁ。（望み薄そう）

ケセラン様の萌えキャラっぽいところ

・へんな語尾
・まるい
・しろい
・ふわふわ
・ちっちゃい
・浮いている
・たまに光る

……あれ、結構揃ってる気がする。なのになんで萌えないんだろう。燃やしたくて仕方なくなるんだろう。

あぁ、性格か。あの偉そうで自己中で気まぐれで空気読めなくて陰険でねちっこくて常識なくて図々しいところがだめなんだ。

そういう性格でも許されるのって、こう、神経質そうな研究者タイプで、もちろん実力もあって（ココすごく大事！テストに出るくらい大事！）ひょろっとしたモヤシっ子系だけど美形で、メガネかけてて白衣着て無表情だけどたまに笑って……って萌えええ！

やば、ケセラン様、擬人化したらもしかしてイケるかもしんない。（あ、その際は変な語尾と甲高い声はなしの方向で）なんだか私の中にあるイケナイ部分が反応した気がする。

うわぁ、私ってマゾっ気もあったんだ。

そりゃそうか、色々理不尽な目にあってきたもんね……。そういうのに目覚めないと耐えられなかったんだね、可哀そうな私。（ほろり）

……ケセラン様の研究から、また一つ知らなくて良かった自分の秘密に気付いてしまいました。

そのに

まだまだ暇なので、こんどはキャベ……キュピルをもうちょっとなんとかしてみようと考えた。

時間つぶしにしてももうちょっと別な事すればいいだろう、と自分でも思うのだが、どうしても粉々に砕け散った子供心を再生したくなって。だってさ、魔女っ娘のマスコットって、可愛くてしかるべきじゃぁないか？　できればもふっとして、肩とかに乗っちゃって、癒し系でいてほしいじゃないか。

肝心な魔女っ娘達があまりそれらしくない、というのも問題だが。

せっかく3人ともタイプの違う可愛い子なんだからさ、もうちょっとふりっふりの衣装に変身してよ。色とりどりのハート型の光線とか撒き散らしてよ。可愛くて装飾過剰なステッキ振り回してよ！

ぴんちになったらもう一段階変身して、さらにヒラヒラの装飾増やして見せてよ！

あぁ、もう、私本気であの魔女っ娘達のプロデュースしたくなってきた。そしてついでにアイドルとして売り出して……！　その為にもキュピルをなんとかしないとな。

キュピルの萌えキャラっぽいところ

・へんな語尾
・まるい
・浮いている
・たまにくるくる回る
・へんなうたを歌う
・かばんのなかに住んでいる

なんだ、キュピルって結構マスコットキャラとして優秀じゃないか？　……キャベツでさえなければ。大玉のキャベツに、頭に見合わぬほっそい身体がくっついてるんじゃなければ！

せめてさぁ、頭は可愛い妖精っぽい女の子で、身体の方はキャベツをベースにしたドレスを着てるって形ならなぁ。それならあの口うるささも、やっぱり空気読めないところも、実はなんの役にもたってないところも、「まぁ妖精さんだからね」って大目にみてあげられるんだけどなぁ。見るからにキャベツだもんなぁ。

そういえばあんな大きなキャベツをいつも鞄に突っ込んで持ち歩いてる瀬名さんって、案外力持ちだな。相当な重量がありそうなんだけど。

キャベツといえば、お好み焼きが食べたい。あんな大玉なら何人分作れるだろう。そうだ、今度の調理実習は是非ともお好み焼きを推そう。ああいうのは大人数で食べた方が美味しい気がするし。

ついでに「うっかり間違えて」キュピルを刻んだとしても、それは仕方の無い事故だしな、ふふふ……。初対面でお腹にまぁるい痣を作られた恨みはまだまだ忘れていないのだよ？

と、新学期の家庭科実習がとっても楽しみになった私なのでした。

そのさん

まだまだまだ暇なので、今度は会長をやっつける方法を妄想してみた。

肉弾戦では絶対敵いそうにないので（だって私はか弱いおんなのこ。会長に限らず大抵の相手には負ける自信がある）やはり精神的に追い詰めるべきだよね。噂という武器を有効活用するべきだよね。

本人を眺めながらこういうことを考えるのはちょっと気持ち良い……。

手段1：トリッパーであることをばらす
欠点：私が頭のおかしい人扱いされる

手段2：実は良い人などではないことをばらす
欠点：私がフラれたかなんかで逆恨みしていると思われそう

手段3：いっそ流言飛語を流す
欠点：本人が笑ってそのまま流してしまいそうでむかつく

手段４：こちらでの宰相姿を、コスプレ写真だと言って売りさばく
欠点：カメラも携帯も手元にない。そして、入手ルートを聞かれると私が困る

あぁ、だめだ、陥れる方法が見つからない。やはり地球に帰ってからではだめな気がする。やはりこっちにいられる、今のうちになんとか工作しないと。
なんだかんだと会長も頭が上がらない姫君達に、なんとしても協力してもらわないと！
私は本をぱたりと閉じて立ち上がった。

「散歩に行ってきます」
「だめ」
い、いま一瞬の間も無くだめって言った！　書類から顔も上げずにだめって！
「もう少しだから、ここにいて。他の本、用意しようか？」
「座ってるのに疲れちゃって。歩きたいんです」
「じゃぁお茶入れて？　盛沢さんって、紅茶入れるの上手なんでしょ？」
どこから仕入れてきやがった、その情報。あと、私はあんたのメイドじゃねぇ！

「い・や・で・す！　外に行きたいんです。会長じゃない人とお話しておきたいんです」
「ますます駄目だよ。今、姫君達と組まれたら、オレもちょっと困った事になるし」
コイツ、気付いてる……！　気付いて監視してたのか。いやむしろ監禁？　鍵かかってそう。
ですよねー。私の地にも大分気付いたなら、私がそういう行動に

移りそうな事くらいわかりますよねー？
「だから、ずっとそばにいてね？」
ニッコリ笑って言う会長の顔面に、私は想像の中で拳をめり込ませたのでした。

そのよん

会長は姫君達と私が必要以上に接触するのを大変警戒している（私がいつ裏切るかと、全く信用してないんだよ失礼だね、うふふ）らしく、本当に朝から晩まで私にベッタリである。

そんな姿が更に誤解を呼び、既に城の中での私は「宰相様が溺愛する謎の婚約者」という不本意な扱いを受けている。いや、あの、ほんと違うんです、監視されてるんです、誰かタスケテ。おはようからおやすみまで見張られてるんです、勘弁して。

本日もきっちり寝室まで送り届けられ、やっと開放された気分でストレッチなどしていると、扉を叩く音がした。はて、こんな夜更けにどなたかな？　先触れも寄越さず来るとは、お忍びだよねぇ？
一応ドアの前の見張りの人がチェックしているはずだから、それなりのご身分の方だよね。どうしよう。

「失礼致します、クミ様、一の姫様がお越しです」
おおぅ。レミア様ですか。こいつは都合がいい。できればルビア様のほうが焚付けやすいんだけど、会長のいないところでコッソリお話できるのならいっそリリア様だって良い。（失礼）

「はい、あの、もう夜着なのですが失礼に当たりませんか？」
「構いませんのよ、わたくしが突然うかがったのですもの」

レミア様は、私の答えを聞くより先に入っていらっしゃった。……いや、何も文句なんてないです。ただ、結局似たもの姉妹なんだなーって思っただけ。

侍女の皆さんにはお茶の用意だけしてもらい、人払いをした。アレ、前にもこんな感じの事があったような。なんだか密談慣れしてきたようで自分が怖い。

「わたくし、今日は姉妹を代表してまいりましたの」

レミア様はひとしきり「まだ夜は冷えますわねぇ」だのと時候の挨拶みたいな話題を一時間ほどしてから、やっと本題に入ってくれた。長いよ、前置き。

「カイトとクミさんが結ばれるにあたって、わたくしたちは納得いたしましたけれど、まだ色々と問題があるのです……。気を悪くなさらないでね？」

一気に気分が向上いたしましたが？　小躍りしたいくらいには。

だよねー、王様お気に入りの、出自のはっきりしないうえに（異世界から来てる事はトップシークレットらしいよ？）しょっちゅう城を空ける若い宰相なんてただでさえ気に食わないのに、更に出自のはっきりしない小娘が出てきて、城内を歩いてるんだもんねぇ。

会長にはそれでも実績があるから簡単には蹴落とせないけど、代わりに私を叩き落そうという流れができるのは自明の理だよね。

自分の娘を会長に嫁がせたい貴族なんてのもいっぱいいそうだしな。

「えぇ、よく分かります。もともと、私、カイト君と結婚なんて、そんな大それた事は……」

「でも安心なさって。とても良いことを思いつきましたの。と言っても、これはリリアの案なのですけれど」

ひとのはなしを、きけ。

「わたくしたちの母方の親戚に、子供のいない家がありますの。身分は伯爵家なのですけれど、それなりに力のある家です。そこに、養女という形で籍を入れてくださいな」

い……いやだ！

そもそも、だ。何でこっちでそんな心配されにゃあならんのだ。どうあっても会長を囲い込んでおきたいのは分かる。しかし、そこに私は必要ないはずだ！

「そうすれば、クミさんの身元をとやかく言う方達も静かになりますわ。リリアったら、姉のわたくしが言うのもなんですけれど、本当に賢い子ですの」

まぁ、お后様のご親族が後見に付けば、そりゃぁ黙るしかないだろうさ。でも根本的に間違ってる。

「あの、私はこちらで結婚する予定は無いのですが……」

もちろん地球でもないがな。ヤツとは、ない。ないといいいなぁ！

（弱気）

「まぁ、そうでしたの？　どうしましょう」

どうにかしなきゃいけない事態でも発生してるんですか？

「わたくし、お友達にお話してしまいましたの。だってお二人ともう、いつ結婚なさってもいいお年ですし、きっと近々正式に紹介されるでしょう、って」

れ、レミアさまあああああああ！

あなた、確かオットリしてるキャラなんだから、そんな早々と爆弾発言しないでくださいよ！　なんでそんなに気が早いの。

「いえ、少なくとも私達の世界では、２０代から３０代で結婚するのが一般的なんです。それにまだお互い学生ですし、当分予定は…

…」
「それは、随分ゆっくりですのねぇ。うらやましいですわ」
……そういえば、こちらの世界の慣習で言えば、レミア様はもうそろそろ適齢期が終わってしまうのだ。会長への想いを諦めて、どこか他所に嫁がねばならないのだ。なんて理不尽なんだろう。でも王族の女性というのは結婚が仕事だからな……。

「では、こちらで先に式だけでも挙げておいてはいかがかしら？ね、きっと楽しいですわ。ドレスはわたくしに用意させて下さいね。あぁ、どうしましょう、妹達にも知らせなくては」
だからこそ、吹っ切るためにもせめて会長の結婚式を見たい、というお気持ちは理解できなくも無い、が。その夢は私が叶えなければいけないんですかね？

「え、や、あの……！」
「こうしてはいられませんわ。ではクミさん、夜更けに失礼致しました。また後日、詳しい事が決まったらお知らせしますわね」
「あの、あのっ」
そうして、すごいハイテンションのまま、私が口を挟むことも許さずレミア様は立ち去ったのである。

……はやくおうちに帰りたい、と心底思った夜なのでした。

あのひとのおはなし。（前書き）

このお話は以下のようなかた向けです。一つも当てはまらない方にはお勧めできません。

＊どんな会長でも許せる
＊会長が盛沢さんをどう思っているのか気になって、夜ねむれない、ねむりにくい！
＊「怖っ」といいながらニヤニヤできる

あのひとのおはなし。

彼女を初めて見たとき、「あぁ、にているな」と思った。

オレが彼女を見つけたのは入学式……と言いたいところだけど、残念ながら桜はもう散ってしまったあとだった。全ての出会いがドラマティックというわけには行かないものだ。

初めて目にした彼女は可愛らしかった。

少し癖のある、色素の薄い髪。甘い顔立ち。小さな身体。なのに負けん気が強そうで、へたに手を出せば噛み付いてくるだろうことは容易に想像がついた。

……ゾクゾクした。

高校に入学したての頃のオレは（今思えばこの若さで何を馬鹿な、と恥ずかしくなるが）世の中に飽きていた。

子供のころから何をやっても器用にこなせたし、勉強だってすらすら頭に入ってくる。それでも幼いころは周りからすごいすごいと褒められたし、それを嬉しいと感じていた。けれど大きくなるにつれオレは「できて当然」の人間ということにされていて、どんなに結果を出しても「まぁアイツだからな」とやっかみ半分で言われるだけになってしまった。

一方そんな世間と対照的にうちの両親はわりと放任主義で、「健康で人並みに正しく育ってくれればそれでいい」という人達だったから、ますますオレは、中学生にして既に人生を見失っていた。何も期待されてないのだと感じたから。自分はこのままなんとなく生きて死ねばいいのだと。

八方美人な性格と両親譲りの容姿のおかげか友人は多い方で、女の子にももてた。異性に興味が無いわけではなかったし、なにより断るのも面倒だったので何人かとつきあってみたけれど、そのうちやっぱり飽きてしまった。思ったほど大事にしてくれない、と失望した彼女たちは自分から去っていった。それを繰り返した。

だって、簡単に手に入るものなんて、それはつまり簡単に捨てられるものだ。

大事にする価値なんて無いと思っていた。全てが、何とでもなるものだと。欲する価値さえないと。

ままならないできごとに遭遇したのは入学式の日。桜を散らす突風にさらわれるように、オレは知らない世界へと渡った。オレの事を誰も知らない所に行ってしまいたいと考えた事がないわけではない。けれどもあまりに突然すぎたし、目に飛び込んできた光景はどう見ても荒事の真っ最中だった。

ルビア姫はあの時の事を未だに「カイトが助けてくれた」というけど、あれは、いきなり現れたオレに驚いた連中の隙を付いて蹴り飛ばしただけだ。言葉も何も分からなくても、連中が刃物を持って女の子を取り囲んでいたものだから咄嗟にそういう行動に出てしまった。それだけのこと。

しかしそのお陰で、オレはあの国で保護された。

あの時ルビア姫が「自分が呼んだ」と主張してくれなければオレはどうなっていただろう。不審者として牢にでも入れられたか、それとも処刑か。良くても城の外に放り出されて野垂れ死にか。

だって当時のオレはまだ、一ヶ月前までは中学生だったんだ。多少スレてはいたけれど、やはりオレは甘ったれだった。頼れる身内もいない、身元も保証されない、そんな国でどうやって生きていけ

と?言葉さえ通じない国で。

魔法という便利な力でやっと意思疎通が可能になったと思ったら今度は「帰し方がわからない」と言われた。どうしても帰りたいとは思わなかったけれど、やはり途方にくれた。

そんなオレを、城の人たちは好意的に受け入れて、あの国で生きる術を教えてくれた。

だから、本当はルビア様こそオレの恩人なんだけど、逆にオレのことを恩人だと信じ込んだ彼女は、まるで物語の英雄に恋するように、オレに恋をした。

「誰か助けて、と強く願ったら、カイトが現れましたの。だからカイトは、わたくしの勇者様ですわ」

と言って。

彼女はオレを盲目的に慕ってくれた。オレの話を興味深く聞いてくれる様子も嬉しかったし、頭の回転も良い人だから打てば響くように言葉が返って来て、会話も弾んだ。きれいな子にそんな風に好かれて、悪い気はしない。男なら誰だってそうだろう?

そんなわけで彼女を憎からず想った事も確かにあった。けれどやはりオレは、彼女と同じ程の好意を返せるほど夢中にはなれなかった。彼女にも、彼女の姉妹にも。

世間知らずの彼女たちの好意はまっすぐすぎて、ひねくれたオレにはちょっと物足りない。彼女たちはオレを理想の男性像に当て嵌めたがっていて、そういうところも苦痛だった。オレにはもっと、現実を理解できる子の方が合っている。

ふとしたきっかけからフォレンディアの政治に関わるようになると、文化や思想のあまりの違いに驚き、そして唐突に「自分」を意

識した。つまり、今のオレを作り上げた両親や、学校、友人関係、彼女という存在。
　ようやく今までの自分の愚かさを思い知った。オレはちゃんと期待されて、与えられていたのに、なぜあんなにいじけた考え方をしていたのだろう。帰りたい、とやっと思えた。

　あちらの魔道士たちの懸命な努力のお陰でなんとか地球に帰ってきたオレは、別人のように性格が変わっていたというわけではないけれど、（それはそうだ、この歳でそう簡単には変われない）「欲しい」と思えるようにはなっていた。
　オレの空虚を埋める誰か。オレを理解してくれる誰か。オレをこの世界に繋ぎ止めてくれる誰か。
　けれども、どこにいるんだろう。どんな人を、オレは求めているんだろう？

　子供の頃、うちで犬を飼っていた。オレがまだ誰からも期待も失望もされなくて、何も疑問に思わず幸せでいられた頃。
　それはキレイな、パピヨンの雌だった。犬の中でもかなり美人（美犬？）だったと思う。年上なせいもあり完全に自分の方が格上だと信じていて、オレに随分張り合ったものだ。プライドが高くて、「お手」というと両手をさっと隠すような犬だった。「お座り」も「伏せ」も、機嫌の良い時と何かをねだる時にしかしなかった。

　いつもツンとして、自分の毛並みの手入れに余念が無く、ふさふさした自慢の尻尾をこれ見よがしに振りながら気取って歩いていた。
　オレはそれに触りたくていつも追い回したけれど、彼女は嫌がってするりするりとオレの手から逃れた。無理やり捕まえれば噛み付いて、暴れて引っかいて。
　けれども本当にオレが落ち込んでいる時は、すごく迷惑そうな顔をしながらもこちらにやってきて、寄り添ってくれた。

彼女が大好きだった。残念ながらオレが小学生の頃、寿命で死んでしまったけれど。

あぁ、そうだ、彼女みたいな人がいい。簡単には堕ちない、けれど捕まえてしまえばオレを見限らないような人。

そうして、「盛沢　久実」という子を見つけた。

彼女はクラス外での交友関係は広くないようだった。いつも他人とは一線を引いて接していて、踏み込もうとする相手を拒絶しているふうにも見えた。

見た目も可愛らしくて成績も常に上位で、なにより、男同士のあまり上品とはいえない話題ではその胸の大きさが注目されていたけれど、あの他者を拒絶する雰囲気のおかげか「高嶺の花」と認識されていて、結局3年になるまで彼女に恋人はできなかった。

3年生になって、せっかく同じクラスになったのだから、と近づこうとしたけれど彼女はなかなかガードが固くて、しかも何故かオレは嫌われているようでどうにもきっかけがつかめない。

オレは、少し強引な手段に出る事にした。

彼女を、巻き込んでしまえ。

三年間図書委員なのは知っていたし（わざわざ彼女が担当する日を選んで本を借りに通ったのだが全く意識もされなかった）資料室に出入りしている事も知っていた。

オレの目に狂いが無ければ、彼女はただの大人しくて可愛らしいだけの子ではない。きっと面白い反応を返してくれる。

ここまでしてやっと彼女に近付いたのだけれど、残念ながらと言おうか期待通りと言おうか、思っていた以上のじゃじゃ馬だった。

女の子に好かれる優しい態度で接しても駄目。強引に恋人ごっこを仕掛けても駄目。噂を利用して捕まえてしまおうとしても、まだ往生際が悪くてなんとか逃げようとする。
だんだん、彼女が足掻く様を見ているのが愉快になってきた。このまま彼女と終わらない鬼ごっこをするのも、きっと楽しいだろう。

だから、オレのものにならなくてもいい。

けれど、オレ以外の誰かのものになるのは、許さないよ？

「…なにか言いました？」
「ううん、なにも？どうかした？」
「いえ、なんか……なんか、寒気がしたもので」

……あぁ。君は、可愛い俺のペット。

あのひとのおはなし。（後書き）

ご存知の方も多いと思いますが、ペットには『お気に入り』という意味があります。

彼と彼女のメール　（拍手お礼＋α）

８月下旬、某日。

そろそろ寝ようかな、と電気を消したとたん鳴り響いたショパンの『革命』に、私は飛び上がった。この着信音はヤツだ。会長だ。

うっかりこんなセンセーショナルな音楽を設定してしまった自分の軽率さにうんざりする。彼の最近の行動はわりと衝撃的で、気分的にはほんとにこんな感じなんだけど、これ、心臓に悪すぎる。何かもうちょっと穏やかなのに変えよう。

メールやり取りするには微妙な時間だよね、私達そんなに親しくないんだから、１０時以降はご遠慮願いたいよ、と文句を言いながらメールを開いた。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：Ｈさんについて

こんばんは。
今日様子を見てきたよ。
と言っても城の中を偵察
しただけなんだけど。
ユーシウス殿下が先頭に
立って、謀反を起こした
みたいだった。
王様含め王族は軟禁状態
だけど、殺されてはいな
かった。確か、盛沢さん
が気に入ってた小さな子

も、元気そうだったよ。

彼女はまだ見つからない
ようだけど、うまく逃げ
回ってるらしい。
また、状況が変わったら
報告するね。

……あー、うん。なるほど、夕食のあとにでもあっちに行って来たのか。私が穂積さんの事気にしてたからわざわざ報告くれたのね。じゃぁ、仕方ないか。

おぉ、我が同志（ユーシウス殿下のこと）はとうとうやっちまったか。そばで見学できなくて大変残念だ。やっぱり親族にはあまり手荒な事できなかったんだなぁ。だよね、どう見てもそんな度胸なさそうだったもん。どうせ身近な誰かに唆されてその気になっちゃったんでしょ？　ヤレヤレ。困ったお人だ。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：Ｈさんについて

こんばんは。
ご報告ありがとうございます。
とうとう謀反ですか。
堪え性のなさそうな方でしたからね。
彼女が一応無事そうで、ちょっと安心しました。
そのうち会えたら、是非

ご家族へ、手紙を書いて
もらってくださいね。

９月初旬、某日。

日曜日の寝坊を堪能していると、パッヘルベルの『カノン』が鳴り響いた。うぁー。誰だ、この至福の時間を邪魔するのは。この着信音は基本的にメール全部に設定してあるので、内容を見るまでは犯人が分からない。

仕方なくもぞもぞと手探りで携帯をさぐりあてて確認すると会長だった。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：ルビア様から

伝言です。
「養子縁組の手続きがあるので、近々フォレンディアに来るように」
だって。
何故そんな話に？
オレが聞いても笑うだけで、絶対教えてくれないんだ。

んぎゃあああ！
なに、あの話まだ消えてないの？　ルビア様も乗り気なの？　大体、私が王妃様の親族の養女に入ったとして、私が会長と結婚なん

かしたらますますその一族だけ栄えてしまうじゃないか。そんなの、他の一族からしたら絶対面白くないと思う。
　ということは、結婚する前に私を片付けちまえって事になって、またもや暗殺の標的になっちゃうじゃないか。却下却下。アリエナイ。てゆーかほんと、無い。

　それにしてもこんな内容がカノンで届くのはやはり釈然としないな。ただでさえ結婚式で使われやすい曲だ。逆に縁起が悪い。何かこう、丁度良い曲は無いものかな……。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：ルビア様から

それはおそらく何かの間
違いです。勘違いです。
もしかすると幻聴です。
耳鼻科か精神科の受診を
お勧めします。
聞かなかったことにして
とぼけておいて下さい。

９月初旬、某日。

　次の週の日曜日、フレンチトーストとセイロンティーのブランチを優雅に楽しんでいると、ＳＦ映画で有名なあの曲が流れた。ほらあの、黒い鎧の人がシュコー、シュコーって言いながら登場する時のアレ。我ながらピッタリな選曲だとは思ったのだけれど、優雅な気分がダイナシ！
　ちっ、これも駄目だな。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：わかった

リリア様にカマをかけたらあっさり答えてくれたよ。
いつの間にかオレ達の婚約の話が発展してたんだね。盛沢さんは知ってたんだよね？
レミア様がドレスの採寸したがってるよ。

まだその話引きずってるんだ？　私先週お願いしたよね？　とぼけといてってお願いしたよね？　なんで自分から探ってんの？　嫌がらせか！　知ってしまったなら仕方ないけど、じゃぁ止めろよ。なんでそんな暢気に伝言預かってくるのさ。私が知っていたからってそれを承諾したわけではない事くらい分かってるくせに。

あの人最近私のこと困らせて楽しんでるんじゃないかって気がしてきた……。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：わかった

レミア様の妄想が暴走しただけのことです。
責任は負いかねます。
あとはご自分でなんとか

始末してください。

９月中旬、某日。

土曜日の夜はちょっと夜更かしする事にしている。勉強は１１時までにして、そのあと気分転換に2時間ほど費やす。だからまぁ、起きてはいたんだけど、けど……。

『サマータイム』が気だるげにメールの着信を知らせたのは、ヨガの立ち木のポーズ（母直伝）をしていた時だったので、バランスを崩して転びかけた。

なんでまたこんな古めの曲にしたのかというと、もともと携帯に入っていたのに加えて最近の話題が夏のできごと（って言い方するとなんか意味深だな）に関するものばかりだから、ちょうどいいかなーって。でもやっぱりこれもしっくりこない。

何故だ。どうしたらいいんだ！

Ｆｒｍ：光山　海人

Ｓｂ：招待状

王様から、盛沢さん宛てのパーティの招待状を預かってるよ。

と言っても、主役はオレと盛沢さんなんだけど。

婚約披露パーティだそうです。

それはともかくまたＨさ

んの様子を見てきたよ。
傭兵団を率いてどこかの
国の要塞を占拠してた。
場所を特定できたから、
直接会えた。
忙しそうだったから手紙
はまた今度って事になっ
ちゃったけど、オレ達が
無事に戻ったって確認で
きてほっとしたって。

えーっと。おちつけ、まずは落ち着け、私。一個ずつ突っ込むんだ。一個ずつ。まず一つ。
婚約披露パーティーってなんだよ！　自分で何とかしろって言ったでしょ？　言ったよね？　なのになんで王様まで巻き込まれてんの。どこまでその話膨れ上がっちゃったの？　そんなおおごとにしたら、あんたあっちでお仕事やりにくくなるでしょうに。

この際だからはっきり言ってやろうかな、「懐柔しなきゃいけない派閥の娘さんと結婚しろ」って。いや、分かってるんだろうけど。そんなこと一番分かっていらっしゃると思いますけど。優秀なおつむをお持ちだから。
それとも、これをエサにして敵味方をはっきりさせようという魂胆なのかね？

そして、あの、穂積さん。どうしちゃったのあなた。こっちにいるときは目立たない大人しい子だったのに、なんでそんな思い切った行動に出ちゃったの。いや、まぁ、巫女姫召喚だからな……。彼女が旗印になって何らかの争いが起こるのもそんなに不思議じゃないんだけど。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：招待状

パーティは、何とか辞退できないでしょうか？
推薦入試が迫っていますし、これ以上はお手伝いできません。
お願いですからあとは自分で何とかして下さい。
光山君ならできます。

Ｈさんは、だいぶ逞しくなったようですね。
元気そうで何よりです。
傭兵団ってことは、誰かと戦ってるんですか？
ユーシウス殿下ですか？
太陽信仰の国ですか？

思わず質問してしまった。ち、一回のやり取りで収まるように気をつけていたのに。だって穂積さんが何してるのか気になって！

返事はすぐに来た。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：それが

オレにもちょっと理解で

きないんだ。
「世界がバラバラだから
私が一つに戻さなきゃ」
って言ってたから、特に
これといった敵はいない
んじゃないかなぁ？
むしろ新しく国でも作る
つもりなんだと思う。
そのための計画が着々と
進行中で、忙しいけど楽
しいって言ってた。

はい、建国ルートみたいですね？　世界を一つにとか、大それた事考えたなぁ。流石だぜ巫女様。そういえば彼女を呼んだ声の主には会えたんだろうか？
しかし、なんかこっちにいたときと違って生き生きしてそう。ご家族に手紙書く時間も無いとは、よほど忙しく行動してるんだな。こりゃ、帰ってきそうにないなぁ。

それにしても、ちょっと前まで目立たないように逃げ回ってたのに、もう傭兵団作り上げて砦の占拠したとか、早すぎない？　時差ってどうなってんの。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：それが

つまり彼女は覇王にでも
なるつもりなんでしょう
か…？人って変わるもの
なんですね。

早く始末をつけて、こちらに帰ってきてくれると良いのですが。
彼女はあちらに残る事を選びそうですね。
光山君みたいに行き来できれば便利なのですが。
でもそういえば、状況を教えてもらうたびに事態が激変しているのは、もしかして数ヶ月単位で進んでいるのでしょうか。
何にせよ、命だけは大事にしてね、とお伝えください。

某月某日？

部屋で静かに本を読んでいると、テクノ調に編曲された『森のくまさん』が鳴り響いた。あぁ、会長だ。
なぜこの曲に落ち着いたかと言うと、やっぱりもともと携帯に入っていたのと、何よりすごくしっくりきてしまったからだ。理由は分からない。けれども色々試した結果、彼の着信はこれで落ち着いた。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：明日

８時に迎えに行くね。

うわぁい、嬉しくない。いやだなぁ、行きたくないなぁ。結局押し負けて頷いてしまった私も悪いんだけど。でもレミア様が他所の国に嫁ぐ前にどうしても会長の結婚式が見たいとか、わざわざ手紙までくれたんだもん。しかも日本語で！

私、翻訳魔法掛かったままだからフォレンディアの文字だって読めるんだけど。（でも英語とかには対応してないんだよ、ほんと不思議）なのに、お願いするなら誠意を見せなければと、会長から習ったたどたどしい字でお手紙くれたんだもん！

あんな健気な事されたら無視できないよぅ。

Ｔｏ：光山　海人
Ｓｂ：Ｒｅ：明日

はい、分かりました。
…ほんと、フリだけですよね？
終わったらすぐ帰れますよね？

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：楽しみだね？

ドレスはレミア様の自信作らしいよ？
オレにもまだ見せてくれないんだ。花婿が先に見るのは縁起が悪いって。
早く盛沢さんが着ている

ところを見たいな。
楽しみだね。

か、肝心の答えが全く書いてねええ！わざとか、わざと私の不安を煽ろうとしているのか！　この根性悪っ！

……私の明日はどっちだ。

なう　ろーでぃんぐ（拍手お礼修正＋1）

いちにちめ

子供の頃はまっていたＲＰＧが、アプリになっていたのでついついダウンロードしてしまった。あんまり懐かしかったから夜更かししちゃったよ。さ、寝よ寝よ。
ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手である。
色っぽいアヤメ・ヌクイおねーさんが「あらン。今日は何のご用かしらぁ」な～んて冒険者さんたちの相手をしている後ろで、依頼書の整頓をしたりギルドカードの発行手続きをしたりしている。地味な仕事だが気に入っている。
今日もまた、お仕事を探しに一人の若者がギルドを訪れた。

「おっす、アヤメねーさん。なんか派手な仕事探して来いってケセラン様がうるさくってさぁ」
ケセラン様というのは、誰もそのお姿を見た事はないが大変な有名人だ。遠くの国からわざわざやってきて、この町に大規模な傭兵団を作り上げた。

しかしあまりに過酷な労働条件に、一ヶ月もたたぬうちにみんな抜けてしまって結局現在も在籍しているのは5人だけだ。あの5人が何故まだ所属しているのかは分からないが、なんだかケセラン様には黒い噂が付きまとっているので誰も聞くに聞けない。なにかものすごくまずい秘密を握られているらしいというのが一般的な見解だ。

まぁ誰にでもそういうのってあるよね。他人が聞けばたいしたことなくても、本人にとっては絶対に知られたくない秘密。（彼らにそんな大した秘密があるとは思えないしな）

それはともかく、このヒショウ・ナカヤマというよりによって一番しっかりしてなさそうな人物が隊長らしいのだがやっている事はもっぱらケセラン様のパシリである。

「派手なオシゴトねぇ……。なにかあったかしら、クーちゃん」
クーちゃん……。いや、いいんだけど。略すほど長い名前じゃないよね、私。
「そうですね。あぁ、これなんかいかがですか？商隊の護衛ですが、ここ、結構大手なんです。名前売っておくのも悪くないですよ」
彼が入ってきた時点で開いておいたファイルから、募集要項や雇用条件の書類を取り出した。

何を隠そう私はこの5人に大変同情的だ。幼馴染で何故か隊員になってしまった魔導師のキララ・ネギシを通して治療師ナナエ・ミズハシさんとも交流があるし、傭兵団に入るまでは町の自警団に所属していたソータ・リンドウには引ったくりを捕まえてもらった恩がある。
もう一人のイツキ・フクシマについては……よう知らんが。ギルドに併設してある酒場でナンパしている姿しか見た事ないな。あのひとなにやってんの？

「商隊の護衛かぁ。ちょっとこれ借りてっていい？　ケセラン様に聞いてくるわ」
そんな判断でさえ自分でできないのかお前は。だからパシリ呼ばわりされてんだぞ！　とは言わずに、「汚したり破損したり無くし

たりしたら強制で受けてもらいますから」と注意して渡してやった。
コピー機とかないから書き写すの大変なんだよ、あれコピー機？
って、なんだ……っけ……

えーっと、昨日なんの夢みたんだっけ。なんか、夢の中でもゲームやってたような？　う～ん……。まぁ、いいや、学校いかなきゃ。

ふつかめ

今日も今日とてちょっとやりすぎた。だってだって、懐かしくてつい！
ささ、早く寝よーっと。
ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手である。
色っぽいアヤメ・ヌクイおねーさんが「うふン。またきてねぇ」な～んて冒険者さんたちの相手をしている横で、手配書を貼り付けたり採取依頼品の整理をしたりしている。地味な仕事だが気に入っている。
今日もまた、お宝を売りに3人娘がギルドへやってきた。

「やっほー、アヤメさん元気ぃ？」
女の子だけのトレジャーハンターとしてちょっと名の知れている『フェアリー』の一員、リョーコ・ヒミさんはいつも元気だ。このグループはしょっちゅう掘り出し物を持ってくるが、一体どうやって見つけてるんだろう……？

「今日は、珍しいもの持ってきたんですよ」
そう言ってアキコ・ユラさんが鞄の中からなにやら固そうなもの

を取り出した。あぁっ、そっと置いて！　机磨いたばっかりなんだから。一見おっとりしたお嬢さん風なのに、彼女は意外とがさつと言うかなんというか。

「んん～？　これって魔法石の塊？　クーちゃん、これっていくらくらいだっけ？」

アヤメさんは、少しは換金表くらいチェックするべきだと思う。

カウンターに座ってうふんあはん言ってるだけじゃ駄目だと思うんだ！　仕事をしろ。

「重さにもよりますけど、まぁこの大きさならこのくらいですかね」

私がさらさらっと書いた金額を覗き込んでクルミ・セナさんが「キャー」と喜びの悲鳴を上げた。

「やったやった！　キュピルすごぉい」

「きゅぴー」

ん？

「あれ、今なんか……」

クルミさんの鞄の中から何か聞こえたような……っていうかキュピルって何。

「ななななな、なんのことかな！」

「やぁねぇクルミったら。へんな声出しちゃって！」

リョーコさんとアキコさんの動揺っぷりが尋常ではない。一体なんだというのか。

「え、あ、あ、えっと、そう！　そうなの、私、嬉しいと変な声出しちゃう癖があるの。困ったきゅぴぃ」

い、痛々しい！　クルミさんの捨て身の誤魔化しに免じてスルーしてあげよう。

ところで彼女の鞄の端っこの方から緑の野菜（？）がはみだしてるけど。夕食の食材？　そういえば今日の夕食は何にしよう。お好み焼きとかいいな。あれ、お好み焼きって、なんだ……っけ……

ふぁぁ、よく寝たぁ。なんかお腹がすく夢を見たような気がする。今日の朝食は和食だといいなぁ。

みっかめ

ゲームも大分進んで、本筋に入ってきた。そうそう、こんな話だったよねぇ、とか思いつつやっぱり止められなくて今日も夜更かし。いけないいけない、さぁ寝よう。

ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手である。

色っぽいアヤメ・ヌクイおねーさんが「いやぁン、お世辞言っても何もでないんだからぁ」な～んて冒険者さんたちの相手をしているその向こうで、違約金の取立てをしたり喧嘩の仲裁（ギルドカード抹消しますよといえばイチコロさ）をしたりしている。地味な仕事だが気に入っている。

今日は、お偉いさんがやってくるのでギルド内になんとなく緊張した空気が漂っている。いつも、床を掃いてカウンターを磨くくらいの手入れしかされていないこの建物が、本日はなんだか華やいでもいる。

それもこれもたった一人のオキャクサマのために。

「こんにちは。お世話になります」

こーのきらっきらしたにーちゃんはカイト・コーヤマといい、ど

っかのお貴族様のぼんぼんである。
貴族らしく王宮とかで謀略に満ちたお話し合いでもやってりゃいいものを、生意気に腕も立つらしく、王様からの勅命でいろんな所のゴタゴタを片付けたり、各組織との交渉役として派遣されているのだ。って王様のパシリじゃん。やーい、パシリ。

まぁそれはいい。それはどうでもいいんだけど、なにせ彼は王様のお気に入りで（パシリとはいえ）強いうえに顔もいいので、訪問がある度に町の女の子達がキャーキャー騒いで用もないのにギルドに殺到するのだ。
普段は「むさい、ばっちい、なんかこわい」と言って絶対近寄ってこないくせにさ。……まぁ、そのご意見がそんなに間違っているとは言わないけれど。

とにかく、そんな無駄な混乱を収拾するために働くのは私なんだよ。
これって給料外のお仕事だよね？だってカイト様とやらも町の女の子たちも、ギルドに所属してないんだもん。私のお仕事はギルドに所属する人たちのお世話だもん。
はいはい、そこ、押さないでー、ロープより内側には入らないでー、ってあぁ、鬱陶しい！

「ギルドはいつ来ても大盛況だね」
「いえ、いつもはもっと整然と、閑散としていますが」
このバカ騒ぎに比べたら多少の刃傷沙汰なんぞ大した事ではない。刃物持ち歩いてりゃ機会があれば抜くさ。心構えはできている。
それになんだかんだ言いつつ皆ちゃんと並ぶしな。そもそも列ができるほど栄えてない。

ところが興奮した集団の心理と言うのはおそろしい。女の子の中

にはたまに、「自分はおんなのこだから」というのを免罪符にとんでもない事をやらかすのが混じっている。
どさくさに紛れて抱きついたり髪の毛引っこ抜いたり、へたすると装飾品むしったりな。記念品が欲しいのは分かるが、傷害罪だから。窃盗罪だから。一人がやると我も我もと殺到すから性質が悪いんだよ。個々は大人しいのに、集まると怖い怖い。

王様のお気に入りに万が一でも怪我なんてさせちゃぁなんねぇ、とギルドの上の方からお達しがあって、結局毎回彼のためにそこら中に入場規制のロープを張って案内（といいつつ何かあったら身を挺して守れと言われているが、こんな非力な私にどうしろと）して回っている。
ちくしょー、アヤメおねーさんはなにをしているんだ！　は、今日は旦那様のお誕生日で休みか！　万年新婚さんめっ。

「クミさん、だよね？　アヤメさんから色々聞いてるよ」
「はぁ……」
色々って、なんか話す事あるのか、私について。
「君と直接話してみたかったんだ。今夜、夕食に誘っていいかな？」
「えっ」
こいつがとんでもない事を言った途端、ロープの向こう側が一瞬シーンと静まり返り、次の瞬間けたたましい悲鳴が上がった。
悲鳴と言うかもう、怒号？　ひぃ、殺意を感じる！　今もしかして私、この町の女の子の大半を敵に回した？　え、なんでこんなことに？

「いえ、あの、私っ、結構です」
身の安全を図らねばと必死で声を張り上げた。みなさーん、私は無実、むーじーつー！
あなたたちのアイドルと二人でお食事なんかしませんよー、とア

ピールするつもりで言ったのだが、何故かそれはそれで気に食わない人がいたらしい。

「ちょっとあの女、カイト様のお誘い断るなんて何様なのっ」
お誘い受けたら受けたで怒るくせにいいっ、と叫び返したくなるようなクレームがどこかから上がった。どうしろってゆーの。
「夜はあの、宿題が……宿題……は！」

そこで目が覚めた。ははは、今日こそ夢の内容をきちんと覚えてたぞー。てゆーかまた夢の恐怖で飛び起きたパターンだよ。
私、どれだけ会長がらみで怯えてるんだろう。ショックのせいか、ここ三日分の夢を全部思い出した。

夢の中でも私って地味な職種についてたなぁ。ＲＰＧ世界で事務職とは我ながらなんて堅実なんだ。しかも受付のおねーさんの助手とか。見た事ないよ。
まぁ、ゲームでギルド行く度に同じセリフしか言わないうえに座りっぱなしのおねーさん見てて、きっと裏方が頑張ってるんだろうな、と思っちゃったせいだろうけど。

しかしケセラン様率いる傭兵団とか、絶対所属したくないよね。そっちの事務員としてこき使われているよりずっといい夢だったよね、うん。ごめん、５人とも、夢の中でさえ助けてあげられなかった。ガンバレ。

キュピルは、お宝探知の才があることになってたのかな？　いや、ちがうな、もしそうだとしてもきっと本当の探し物だけは探せない探知機に違いない。アレがそんなに役に立つはずが無い。
どうせ「こっちにある気がするきゅぴー」と言いながらミスリードして、たまたま運よく何かを見つける、というパターンに決まっ

てる。

そして……会長。最近ヤツのファンらしきお嬢さんがたからの視線が痛くて痛くて、視線で刺し殺されそうなんだよ。そのせいであんなオチになったんだろうな。

あーもー、まだ朝の４時だよ。もう一回ねよーっと。今度こそ安眠できますように。

宿題？抜かりなくやってあるからだいじょー……ぶ……。ぐぅ。

よっかめ

あんな夢をみてもゲームはなかなか止められない。というか、物語は佳境に入っているのだから止めたらなんだか悔しいじゃないか。くそぅ、中ボス強いな！よし、今日はここまで。ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手である。

色っぽいアヤメ・ヌクイおねーさんが「やぁン、ほんとに、これもらっちゃっていいのぉ？」な～んて冒険者さんたちの相手をしているその影で、ブラックリストの作成をしたりちょっと後ろ暗い情報の売り買いをしたりしている。地味な仕事だが気に入っている。

今日は見慣れない二人組みがギルドを訪れた。

一人はやや小柄で、多分女性と思われる。頭からフードをすっぽりとかぶっているが布はなかなか上等で、どうやら身分のある方のお忍びのようだ。

もう一人は大変立派な体つきをした男性で、傭兵の見本のような

人だ。私が持てば両手でも持ち上がらないであろう大きな剣を左腰にぶら下げている。刃こぼれしきっていて、あれはもう刃物と言うより鈍器だ。実際そのように使用しているのだろう。

女性らしきほうがアヤメさんに声をかけた。
「すみません、この町に有名な傭兵団があるとかで、こちらで仲介していただけるとうかがったのですが」
「有名な傭兵団〜？　もしかして、ケセラン様のとこかしらぁ？」
ちょっとちょっと、アヤメおねーさんや。情報料さえ頂いていないのにペラっともらしちゃだめですよ。

仕方がないので私はしぶしぶ口を挟んだ。
「まずは、システムの説明をさせていただきます。お二人はこちらのギルドに所属の方ではないようにお見受けしますので、情報料が発生します。そののち、ご希望であれば仲介も致しますが、そちらにも手数料が発生します」
ごそごそととりだした値段表を見せると、傭兵らしき方が頷いた。適正価格だと判断されたらしい。

しかし、ケセラン様の傭兵団は「ケセラン様が」ある意味有名というか悪名高いのであって、ご期待なさってるようなお仕事には向かないと思うんだ。たぶん。だって5人しかいないんだもん。

「こちらでご紹介できる傭兵団は3つほどです。失礼ですが、ご依頼のおおまかな内容などをうかがっても？」
二人は、一瞬視線を交わした。女性が頷いた。
「……よろしければ奥に個室がございます。どうぞこちらへ」
まぁ、お忍びで傭兵団雇いに来る理由なんてろくな事じゃない。そういう密談のためにちゃんとお部屋が用意してあるものなんです、ギルドには。

私はカウンターをアヤメさんに任せて、奥の部屋へ入った。

「……つまりこちらはお隣の大陸の、尊き月の巫女様であり、現在逃亡中でいらしゃるのですね？」

「幸い民衆は巫女様の味方だ。これを機に、悪政を敷く王家を討つ。そのために優れた傭兵団を必要としている」

はい、間違ってもケセラン様のとこは紹介してはいけない事例でした。あぶないあぶない。

「先ほどカウンターでお尋ねになった傭兵団は、少々特殊ですのでそのようなご依頼には適しておりません。代わりに、こちらの二つでしたら規模も大きく、戦場での功績も上げています。いかがでしょう？」

ケセラン様のところが特殊すぎるのであって、一般的な傭兵団は戦争屋である。戦に参加してなんぼというか……。

その道で食っていこうと自分で決めた奇特な連中の集団なので、紹介するのに良心は痛まない。

「いいだろう。どのくらいで集められる？」

「まずは団長クラスと交渉していただきます。こちらでできる手続きはそこまでです。あとは余程のトラブルがない限り、ギルドは関知いたしません」

しかしまぁ、ホヅミさんも大変だよねぇ……。あれ、ホヅミ……？　穂積、ってえーと……。

「あぁ、またあの夢かぁ」

ボーっとする頭で反芻する。そういえば穂積さんは実際、傭兵団を率いて砦を占拠して戦ってるんだよね、何かと。えーと、たぶん運命とかそんなのと。

ところで私の仕事内容がどんどんすさんだものになっていませんか？　もしかして後ろ暗い所担当になってる？　いや、好きだけど……。そういうの、割と好きだけど。

あの傭兵さんは、そういえばあんな顔してたっけなぁ？　全然覚えてないと思ってたけど、なんとなく似てたと思う。でも夢では常識的な金髪程度になっていた。やっぱり私、あの世界の色彩の豊かさにはなじめなかったんだな。

穂積さんはその後どうなったんだろう。また近いうちに、会長が見てきてくれるといいなぁ。ついでにお手紙の回収も。

さぁ、起きよう。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

そのひとのつぶやき。（前書き）

竜胆君視点です。一応警告いたします。

＊どんな竜胆君でも許せる
＊竜胆君が普段どういう目で盛沢さんを見ているのか気になってゴロゴロしたことがある
＊よく分からない文章でも雰囲気でなんとなく理解するのが得意

上記の条件を、二つ以上満たしていらっしゃる方にお勧めの作品となっております。

そのひとのつぶやき。

自動販売機を見上げる、というのはどういう気分なのだろう。

子供の頃は確かに自分も見上げていたはずなのに、その気持ちがどうしても思い出せない。昔からたいして頭が良くなくて気も利かない性質だったから、きっと何も考えずに過ごしていたんだろう。

高校に入るまで気にしたこともなかった事が気になるようになったのは、全て彼女のせいだ。

彼女はいつも夕方5時過ぎに渡り廊下に現れる。その姿を合図に、剣道部は片付けを始める。まさか本人も時計代わりにされているなど思いもよらないだろうが、図書館からの帰りに使っているらしい渡り廊下は剣道場の窓からよく見える位置にあるのだ。

時間に多少の前後はあるものの時計よりもわかりやすいので、入学してから三年間、彼女は密かに剣道部の終了を告げる係だった。

真夏の熱気の中での練習など子供の頃から慣れている俺でさえ辟易するくらいだから、部員の中には彼女を見ると歓声まで上げる連中がいる。俺も、不思議なほど心が弾んだ。

三年になって、彼女と奇妙な縁ができた。きっかけ自体は決して喜ばしいものではなかったが、彼女と話す機会ができたのは悪い事ではない。

その頃からやけに目に付くようになった。彼女が、何かを見上げる姿。

それは例えばテストの順位の発表であったり、（彼女は俺とは違って頭がいいので、学年で２０人も張り出されれば必ず入っている）

何かのポスターであったり、そして、自動販売機であったりする。
俺はもともと背が高い方で、あまり何かを見上げるという事をしない。
けれども彼女は自動販売機の前に立つと首を上に傾けて、それでも足りないといわんばかりに踵を少し上げて、じっとみつめて眉をきゅっと寄せる。唇に指をあてるのはクセなのだろうか。
そうして、もう一度眉を寄せてから、今度は指が彷徨う。結局押すのは同じボタンなのに、彼女はいつも一通り同じ仕草をする。
その指に、今度は目を奪われた。白い指。美しく整えられた桜色の爪。
母や祖母の荒れた手とは全く違うその華奢な作りに、眩暈がするような気がした。触れたい、という強い衝動が起こった。
6月ごろ、新渡戸と桂木の痴話喧嘩に唐突に巻き込まれ、がくりとうなだれた彼女の頭にそっと触れてみた。
きちんと手入れをされているのが俺にさえ分かる細めの髪はふわりと一度手のひらに吸い付いて、すぐに離れた。触れているのに本当は触れていないのだと錯覚させるその髪はまるで彼女そのものだ。
惜しくなって二度三度と触れた。……以来、癖になってしまった。
本人にはどうやら自覚が無いようだが、彼女は注目を浴びてしまう人間だ。いい意味でも、悪い意味でも。
そもそも剣道部が彼女を終了の合図にしたのも、遠目からでもすぐに判別できてしまうせいだ。容姿も振る舞いの一つ一つも、何故か目を引いてしまう。
それなのに外界にまったく興味が無いというように、拒絶する空

気を纏っている。彼女は、不可侵の花のようだった。薔薇のような棘は無く、ただ触れるのを躊躇わせる花。

裕福な家のお嬢様なのだと聞いた。なるほど、いままで俺の周りにいた女性とは大分違うのはそのせいなのだろう。俺はどちらかと言うと男勝りな女性しか知らなかった。彼女のいかにも女性らしい雰囲気は、なんだか胸が痛くなるほど可憐に思えた。

色素が薄めなのは両親のどちらかが外国人であるからららしい、という噂も聞いた。つくづく俺とは世界の違う人物だと感じるのに、俺はまだ、気がつけば彼女を目で追っている。

想像してみた。彼女の恋人として隣に立つ自分を。

気の利いたことひとつ言えない、笑顔さえ得意ではない。何をしてやればいいのか分からない。彼女を喜ばせてやることもできない自分を。

俺は剣道以外に何一つとりえの無いつまらない人間なのだ。ただ黙ってその髪に触れるのが精一杯で、それ以上は指一本動かせない。

木偶の坊の様に彼女の隣に立って、自分からは何も話そうとしない俺を気遣って一生懸命話題を探してくれる彼女の言葉に、頷く事しかできない。滑らかに言葉をつむぐその唇に、確かに心がざわめくのに。

そうだ、きっと今と何一つ変わることなどできない。

夏休み中、剣道部の合宿先で彼女が話題に上ったことがあった。

初めは彼女に関する噂、成績の事、容姿の可愛らしさなどをぽつりぽつりと話していたのだが、だんだんと卑猥な単語がでてきて（俺達の年頃では仕方の無いことではあるが）とうとう聞くに堪えな

いほど好き勝手言い出した。彼女にこうさせたい、だの、どんな格好をさせたい、だの。

俺はその時、怒りで血が逆流するような気がした。彼女がそんなことをするものかと、怒鳴り散らしてやりたくなった。

けれども結局俺はただ黙って部屋から出て、上った血が落ち着くまで一人素振りをしていただけだ。何も言えない。彼女のために、何もしてやれない自分が不甲斐なかった。

夏休みがあけた頃から、光山と二人でいるのをよく見かけるようになった。傍目からでも二人はお似合いで、どこにも他人の入る余地はないような印象を受けた。

常に穏やかに他人を拒絶する彼女が、光山に対しては素直に感情をぶつけているのを目にした事もある。そんな彼女を光山は、眩しそうに目を細めて、信じがたいほど柔らかく笑っていた。

あぁ、そうだろうとも。彼女には光山のような男が似合っている。家柄も、頭も、容姿も、俺ではとても敵わない。彼女を噂や下種な話題からうまく守ってやる事もできない俺が彼女を望むなんて間違っている。分かっている。

あいつならきっと全てうまくやるのだろう。笑いながらさらりと全ての悪意をかわして、そうして彼女の心も手に入れるのだろう。

けれども、彼女が変わらず俺を見上げて笑ってくれるので、俺はつい手を伸ばしてしまうのだ。

俺が望む事はただひとつ。叶えてくれるならそれ以上はもう望まない。

ただ、その、白い指に。桜色の爪に、くちづけたい。

そう言ったら、笑って許してもらえるだろうか？

「どうかした？　竜胆君」

「……なんでもない」

「そう？」

……本当は、彼女の全てが欲しいのだけれど。

そのひとのつぶやき。（後書き）

若干不完全燃焼。
大きく改稿することがあれば、活動報告にてその旨書きますが、今はこのくらいで・・・。

なう　ろーでぃんぐ2　（拍手お礼修正＋1）

先日ダウンロードしたアプリゲームには、もしかしたら夢に作用する魔法か呪いでも掛かっているのかもしれない、と思い始めたが今更やめられないとまらない。

やっと中ボスを倒して現在お話はインターバルというか、ほのぼのパートに突入中だ。ここで街の人達といっぱい交流しとかないとエンディングがやたら味気なくなってしまう仕組みだったはずなのでまめに話しかけて、悩み事を解決して回っている。

本編のせわしなさに比べてほのぼのしすぎてて眠いよぅ……。

なんで世界を救う勇者様がおじいちゃんの入れ歯探しにパンツいっちょで噴水に飛び込まなきゃならんのだ。噴水止めて網ですくえよ……。

ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手である。

今日の仕事はオフなので、お買い物をしようと思い立った。

お日様の下を歩けるって素敵。だっていつも、一日中あの薄暗くてなんだか汗臭いギルドの中にいるんだもん。まぁ最近、街中歩いてると一部の女の子の視線が怖いけどな！　だれかさんのせいで。

うぅ、そういえばあの人また来るんだよなぁ……。

とりあえず雑貨屋さんでお化粧品買って、どこかでお食事して、王立図書館に寄って、適当に食材を買って帰ろう。差し支えなさそ

うな場所だけ思い浮かべ、私は今日の予定を組み立てた。

まずは雑貨屋さん。

この雑貨屋さんは、町では有名だ。経営している夫婦が。（って、この町こんなんばっかりか）

テツオ・ニトベとその妻ヨーコは、誰がどうみても父娘にしか見えない。あれで二人は同い年だというのだからそれはもう驚きだ。何故か結婚式に招待されて参列した私でさえ、パパのお手伝いを一生懸命している娘にしかみえない。

二人とも自覚しているので、たまにやってくる外のお客にはあえて勘違いさせて、けなげな娘の姿に感動していらないものまで買わされる被害者を量産している。恐ろしい夫婦だ。商魂たくましい。

まぁ、私はだまされないけどねっ！

「あ、ギルドの裏ボスさんだー」

ちりりん、と涼やかな音を立ててドアをあけると、第一声から大変失礼であった。

うん、まぁ、彼女が失礼なのはデフォルトだ。怒っちゃダメ、怒っちゃダメ。（自己暗示）

「……こんにちは。いつもの化粧水欲しいんです。あと、グロスも」

「いつものー？　んーと、あったあった。あ！　でもたまには違うのどうかなぁ。新作いれたんだよ。てっちゃぁん！　てっちゃーん、アレもってきてぇ」

断る間もくれないのもデフォルトだ。落ち着け、クールに行こうぜ、私。

「今日はあまり時間がないし、新作とやらは今度でいいわ」

「えー、そんなこと言わないでよぅ。ちょっと仕入れ伝票間違っちゃって、在庫大変なの～。おねがぁい」
うっ。そんな目で見つめるとは卑怯なっ。

こうして私は、悔しいことにニトベ夫婦の餌食になって、普段使っているものの2倍のお値段の化粧水を買わされたのであった。……お人よしのこの身が憎い！

気を取り直してランチタイムだ。実は目をつけてたお店があるんだよねぇ。オープンテラスになっていて、すっごくお洒落で、お手ごろ価格のお店。
普段は色気のかけらもない職場にいるので、たまにはこういう女の子らしい所に行かないとね！

けれども残念な事に、お年頃の女の子たちの考える事など似たり寄ったりらしくて、お目当てのお店は大混雑中だった。

列に並んだとしても予約のお客さんがまだまだいっぱいで、とてもいつご案内できるか分かりません、と断られてしまった。うぅ、残念。こんな事ならさっきの雑貨屋でのらりくらりと逃げ口上探さずに、とっとと折れていれば良かった。無駄に時間をロスしただけだよ……。

どこか良いとこ無いかなぁ、とふらふら彷徨っていると、聞き覚えのあるお店の看板を見つけた。
『カップ＆ハート』ってお店、確か『フェアリー』の子達のお気に入りだったよね？　外見はやたらメルヘンチックで、まるでお菓子の家みたいだ。どうしよう、入ってみようかな。

少なくともこの外見のお店にいつも見ているようなむさい連中は

いないだろうと、ある意味安心して入った。確かここは、アップルパイが絶品だとか言ってたよね。メインを軽いお食事にして、デザートにお願いしちゃおう。

「いらっしゃいま、せ……」

わくわくしながら入ったのに、迎えてくれたウェイトレスさん（？）が何故かいきなりお盆を取り落として泣き出してしまった。な、何、一体？

お盆の音に、厨房の方から二人の男性が飛び出してきた。

「何事だ、アキラ」

「どーしたぁ？」

うわ、ちょっと、私知らないよ？こっち睨まないでよっ。

「ち、ちがう、の、やっと、やっとみつけたから、うれしくて……」

女の子がひくひくとしゃくりあげながら私の弁護をして……くれたんだよね？　意味わからんけど。しかし、二人には通じたらしい。安堵のため息をついて、改めてこちらに向き直った。

「……えー、あー。失礼しましたお客様。コイツは、その、ちょっと勘違いして驚いたようです」

「とりあえずお席へどうぞー」

……なんか誤魔化された気がするけど、まぁいいや。うん、誤解があったんだろう、色々。

ギルドでお仕事してるといろんなことに出くわすものだから、スルーは得意ですよ？　都合の悪そうな事には首を突っ込まない。これがこの世界で生きるための鉄則だ。

結局、お昼はクラブハウスサンドと、アップルパイを注文した。アップルパイはお店のサービスにしてくれるそうだ。迷惑料という

か。
焼きたてのアップルパイにバニラのアイスが添えてあって、アールグレイの紅茶と一緒にいただくと本当に幸せな気持ちになれる。
……隣に座ってうっとりと私を見つめる女の子さえいなければ。

「おいしい？　アツシのアップルパイって世界一なのよ」
「……はい、おいしいです」
「紅茶はタカフミが入れたの。アールグレイ、すき？」
「……はい、すきです」
「うふふ……」
だ、だれかやっぱり説明してええええ！

美味しかったけど気疲れのする食事（たしかカイト様と夕食に行ったときもこういう気分だった）をやっと終えて、私はふらふらと図書館へ向かった。
お昼までに大分疲れてしまったので帰ろうかなとも思ったんだけど、なんかスケジュール変更するの癪じゃないか。こうなったら意地でも制覇してやるんだ、と根性でたどりついた。

図書館は素晴らしい。何が素晴らしいって、品揃えは結構いいのに町の人達はあまり使用しないので、知り合いに会いにくいところ。
ここで会うのはキララくらいで、彼女も私と同じく静寂と平穏を好む人（のはずだったのに何で傭兵団に……）だ。ここなら存分に、本を積み上げてゆっくりできる。

そんなこと言うとアヤメさんなんかは「家で読めばいいのにぃ」ともっともなご意見をくれるが、私はここの雰囲気が好きなんだよ。

古いインクの匂い。光を浴びた埃の匂い。右を向いても左を向いても前も後ろも本だらけ。あぁ、私、いつかはこういう書庫を作る

んだ……。
と、幸せな将来を描いてふにゃっとしていたら突然館内が騒がしくなった。なんだなんだ？
「見つけたわよぉ、クミ・モリサワ！まさかあなたがこんな町に隠れていようとはね！」
げげげ！
「あ、アンジュ・シノザキ！　と、お付きの二人？」
「あなたを探すのに随分苦労させられましたよ」
「すみませんすみません、お騒がせしてすみません！」
よりによって厄介なのがきちゃったよー。なんでここがわかったんだ。
「フン、モリサワの屋敷にいた頃もずーっと書斎にこもっていたあなたの事だからと思って、大きな図書館のある町をしらみつぶしに探したのよ！」
探したのはお付きの二人でしょうが。
「……とりあえず、外に出ましょうか」
周りの目のプレッシャーに耐え切れず、私は泣く泣く読書を諦めた。
私の家は下級貴族で、血筋はそれ程でもないのだが代々貿易の商才があった。よって、かなり羽振りがいい。
アンジュの家はその逆。血筋はそこそこ良いが、道楽が過ぎて家計を圧迫し、今では同じくらいの家柄の人々との付き合いを保てないほどになっている。
というわけで我が家とシノザキ家の領地が近かったせいもあり、彼女の父親のたっての希望で、彼女と私は「お友達付き合い」をす

る羽目になった。
父に融資してもらうための手段の一つなんだろうけど、とにかく苦痛だった。思い出したくない程度には。
やがて気の早い母が私に婚約話を持ってきたので、私はさっさと家から脱走して、現在に至るのだが……。なんで追いかけてきたんだろう。

「勝ち逃げなんて許さないわよ！　あのお方との婚約話までいただいておいてそれを蹴って逃げ出すなんて、私に対する挑戦？」
あのお方ってダレ。いやあの、相手が誰なのかも知らずに逃げ出したものでね。
だってさ、きっとロリコンのオジサン貴族の後妻とかにやられちゃうと思ってたから……。アンジュが悔しがるような相手だったのか。
いや、でも聞きたくない。嫌な予感がするもの。絶対、絶対聞きたくなんかないからね！

「国王様の覚えもめでたいカ……」
「キャーーーー！」

飛び起きた。意志の力で飛び起きたよ？　聞いちゃいけない名前は聞かなかったからね！　いやぁほんと、このゲームなにかあるんじゃないの？
っていうか私の設定に新しい情報が追加されてたなぁ。我ながら美味しい設定な気がする。（婚約者云々は置いといて）下級貴族の娘が家を飛び出して、ギルドで事務職とはまたまた……。まぁ、夢なんだからそのくらいのご都合主義で良いよね？

あ、そういえば、まだ食材の買出しに行って、ないな……。

ぐぅ。

あれ……？　私、さっきまで何してたっけ。図書館に行って、本を探して……お目当ての本がなくて諦めて出てきたんだっけ。

なにか困った事がおきたような気がしたんだけど、気のせいかな。最近なかなかお休み取れなかったから疲れてるんだよね、私。変な白昼夢でもみたんだろう。

こういう時はやっぱり無駄に外出なんかしないで早く帰って休むべきだよね。さぁ、夕食の買い物してかえろーっと。

贔屓にしているパン屋さんに行くと、店から出てくる人々の顔が一様に微妙なゆがみ方をしていたので、すぐに店番が誰で、さらに誰が来ているのかもわかった。

からら～ん、と、ニトベ夫婦の雑貨屋とはまた違った音をたてるドアを押してしぶしぶ中に入ると、ここの看板娘ケーコ・アオイと肉屋の息子ケイスケ・アカイがいちゃついている真っ最中。

「ケイスケくん、いつも手伝ってくれてありがとう」

「なにいってんだよ、俺、いつも暇だからさぁ」

……肉屋の息子は冒険者になると言って家を飛び出したものの、一向に芽が出ず、採取依頼とスライム退治と荷物運びの助っ人で糊口をしのいでいるはずだ。

暇ってこたぁないだろう。剣の腕磨くとか、依頼の多い採取品をとりだめしとくとか、いっそ実家に帰って家業手伝うとかあるだろう。

はっきり言おう。君がここに毎日何時間も居座ってケーコさんとじれったくいちゃつく姿は、すでに公害だ。来る度に同じやりとりを聞かされるお客の身にもなってくれ！もう3年も経つのに同じ事繰り返しやがって！

「ごめん、そこの……あっ」

「あ、わ、わりぃ」

伸ばした手がちょっと触れ合っただけで一々顔を赤らめて照れるなっ！　見てるほうがこそばゆいわ。

ここのクロワッサンが絶品と言っていいほど美味しくなければ、お店変えるんだけどな。現に、辟易しながらカウンターに列を作っている人々は皆、この時間に焼きあがるクロワッサンがお目当てだ。それ程美味しいのだ。

まぁ、行列が長いのは彼らがいちゃつくのに夢中で仕事が滞ってるせいなんだけどね！

やっとパンを買って外に出た頃には、大分暗くなっていた。あぁ、疲れた。せっかく焼きたてのパンを買ったのに、もうこのまま眠ってしまいたいほど疲れた。

よろよろと歩いていると後ろから声をかけられた。

「あ、クミさん、ちょうど良かったわ」

キララ・ネギシだ。そういえば今日は図書館では会わなかった、よね？　どうも図書館の記憶が曖昧だな。なんだろう。

「キララ、こんばんは」

キララは、私が小さい頃に屋敷に滞在していらした学者さんの娘で、幼馴染である。家を飛び出したときもコッソリ協力してもらっ

た。

なかなかの魔法の使い手で、将来有望だったのに、なぜかケセラン様の傭兵団なんかに入っちゃって……。なんとか抜けさせる事はできないものかなぁ。

「奥様からクミさん宛のお手紙がきてるの」

なんですと！

「え、え、お母様、私がここにいるってご存知なの？」

「……ごめんなさい、クミさんがうちに逃げてきた日のうちに、父が連絡してしまったみたいなの。もちろん、しばらく本人の好きにさせてあげて欲しいっていうお願いの形で」

あー、うん、ネギシ先生は真面目で律儀な方だから、パトロンだったお父様に義理立てなさったんだろうなぁ。

「旦那様も奥様も、ご承知なのよ。自分でお金を手に入れるというのがどういうことなのかを知る、良い機会だろうって」

「そっか……。先生には本当にご苦労をお掛けして、悪い事しちゃった」

両親の掌の上で泳がされていた事実はショックだが、まぁそうだよねぇ。流石に世間が分かってきた今では、納得の事実だ。

私は手紙を受け取って家に戻った。

クミさんへ

お元気ですか？　ネギシ先生からあなたの様子はうかがっています。大変立派にやっているそうで、わたくしも鼻が高いです。貴女は昔から、優しくて、可愛くて、お行儀が良くて、賢くて、わたくしの自慢の娘でしたもの。

貴女が家を飛び出してしまったとき、わたくしがどんなに心配したか、想像もつかないでしょうね。ネギシ先生から連絡をいただいて、やっとお水が喉を通るようになったほどなのですよ？　ともあれ、過ぎた事を今更言ってもしかたありませんね。

あれから3年も経つのですね。もう貴女も１８になります。できればそろそろ家に帰ってきてはもらえませんか？　貴女の婚約のお話はまだ有効です。

コーヤマ家の皆様はとても理解のある方達で、貴女が社会勉強に出たと申し上げたら大変感心してくださいました。貴女のお相手のカイト様も、陛下のお役目ついでに何度も会いに行ってくださっているのでしょう？　先日は一緒にお食事に行ったのですって？　そんなに親密になったのなら、そろそろ結婚しても良い頃ではないのかしら。

せめて一度、こちらに顔を見せにきてはもらえませんか？きちんと話し合って、これからの事を考えましょう。

遠き地にて　母より

……遠き地って、同じ国内だしそんなに領地から離れてないんだけどなぁ。

いや、ええと、婚約者ってカイト様だったんだ？　（あれ、でもこれは知ってたような気がする。おかしいな）

お食事するほど親密になったって、そいつぁ誤解だ。

相変わらず娘に夢みてんなぁ。

などと、散文的な感想が出てくる。思考が麻痺しているとも言う。
えーっと、えーっと、とりあえずアレだ。
寝よう。

ぐぅ。

朝。
いったいどちらが夢なのか分からなくなってきた。こちらの私って、あちらの私が現実逃避に見ている夢なのだろうか。胡蝶の夢状態だ。
でもなぁ、どうせ夢で現実逃避するなら、もうちょっと平凡な人生選ぶべきだと思うんだ。だからこっちの私が本物ということでいいよね。
……そろそろあのゲーム、クリアを諦めるべきなのだろうか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

なう　ろーでぃんぐ3　（拍手お礼修正＋1）（前書き）

＊ぶっちぎりで光山君のターンです。苦手な方はそっとブラウザを閉じてください。

なう　ろーでぃんぐ3　（拍手お礼修正＋1）

あのゲーム、やめようかやめまいか、悩んだ末にまぁ夢くらいならいいじゃん、という結論に達したのでまだまだ私の冒険は続くのである。（ぴこぴこ）

さて、ねよーっと。なるべく平穏な夢がみられますように。

ぐぅ。

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさんの助手、が本業だと自分では思っているのだが、今日は久々に「貴族のお姫様」モードになっている。

先日母から届いた手紙にほだされて実家に顔を出してみたら即このザマだ。私が帰ってくるのを見越して色々セッティングしていたんだな。なんて抜かりのない両親だ。

私は今、大変な苦境に立たされている。あのカイト・コーヤマがにっこにこしながら我が家にやってきたのだ。どうやら私に会わせたい人がいるらしい。そしてそれは、父も母も承知していたらしい。

どうりでで入念に支度させられたわけだ！

「久しぶりだね。ギルドで仕事をする姿も可愛らしかったけど、そのドレスもとても似合っているよ」

「……アリガトウゴザマス」

「まぁ、クミさんったら緊張しちゃって。カイト様、娘をお願いしますね。ではわたくし、お茶会に呼ばれておりますので」

母は無情にも私とカイト様を二人きりにして出かけてしまった。

いや、まぁ、侍女がついてるから正確には二人きりじゃないけどさ。

馬車の中でカイト様から話を聞かされて、私はため息をついた。

大変だ、どうしよう。なるほど両親が私に言わなかったわけだ。また脱走すると思われたのだな。流石にしないよ、これ以上家の面子を潰すような真似は。

「憂鬱そうだね。姫君達にお会いするのがそんなに苦痛？」

「いえ、ただ……緊張します。私のような身分の者が王族の方とお会いするなんて」

カイト様はどうやらこの国の姫君達も陥落させてしまったようで、婚約者とやらに会わせろと再三要求されていたらしい。今回、私が帰ってきたことを耳にした姫君達が（どうやって知ったんだろう）なんとしても会うとごり押しなさったそうだ。

私の家は貴族とはいえ王宮に簡単に出入りできる身分ではないので、わざわざ姫君達がお忍びでコーヤマ家の別宅に遊びにいらっしゃるのである。そこに「たまたま」私が訪れて、「姫君達のご厚意で」お茶会に招かれるという設定だそうだ。貴族社会の体面ってめんどくしゃー。

そこまでして私を品定めしたいのか！　いっそ王家の権力で婚約破棄させればよろしかろうに。あぁもう。３年間も平民として暮らしてきた私になんてことさせるんだよ。とんでもない無礼をやらかしたらどうするんだよ。

「大丈夫。姫君達も君を見れば気に入ってくださるよ」

何を根拠に言うのだ、この口は。

目の前の形の良い口を思い切り横に引き伸ばしてやりたいとうずく両手を必死になだめながら、それでも私は馬車が到着しなければいいのに、と願っていた。

コーヤマ家の別宅は、別名「薔薇の城」と言われている。その名

の通り見事な薔薇園が広がっており、さらに屋敷の一角には高価なガラスで作られたサンルームがあって、冬でも薔薇を楽しむ事ができる。

この部屋の中には滝が作られていて、その涼やかな水の音を聞きながらお茶会ができるようになっている。

我が家は、お金はあっても身分がそう高くないので、こういう贅沢なものを持つ事は自粛している。分不相応だからな。

かといってアンジュのところはお金がなかったので、やっぱりこんな素敵なお部屋に通された事はなかった。あの家、経費削減でほとんどの部屋を閉鎖してるんだよね。そうじゃなくても怪しいコレクションルームだらけだし。

伯爵家とはいえ王族と縁戚関係にあるおうちは違いますなぁ。ほんと、なんでたかが男爵家の娘なんかと婚約したんだろう。持参金目当て？　でもこの部屋見る限り、うちよりずっと裕福ですよね。

まぁそんなことは置いといて、なるほどここならば姫君達がお忍びで遊びに来るのに都合がいい。対外的には薔薇を見に来たのだ、という事にできるからな。彼女達はあくまでも薔薇を見にいらして、たまたまそこに出くわした身分の低い娘にお声をかけてくださるのだ。そんなお心遣いはご遠慮申し上げたいんですけどね！

姫君達はまだ到着なさっていないそうなので、私は「ちょっと遅れて登場」するために、他のお部屋を案内してもらうことになった。

「結婚したら当分はこの屋敷で過ごす事になるから、今のうちに慣れておくといいよ」

不吉な事を言ってにこにこ笑うカイト様に手を引かれ、私は屋敷見物に出発した。

広い。とにかく広い。でもコレクションルームは素晴らしかった。アンジュの家とは集めるものが違う。呪われた品コレクションじゃないというだけで、どうしてこんなに輝いて見えるんだろう。絵の趣味も良いし。いいなぁ、この屋敷。欲しいなぁ。（屋敷だけ）

それにしても、私は本当にこの人に嫁ぐ事になってしまったのだろうか。3年間も失踪（といいつつ泳がされてただけ）していた娘と、王様の覚えもめでたい有望株が結婚なんておかしくないですか？その辺、伯爵家のご夫妻はどうお考えなんですかね！

「よく使う部屋は好きなように改装していいよ。なんだったら今からでも。寝室はどうしたい？」

し、寝室とか良いから！　わたし、一人でメイド部屋にでも押し込んでくださってかまいませんからぁ！

「いえ、あの、結構です。どのお部屋も十分素敵だと思います」

「好きな色は？」

「薄紫です」

「なら、カーテンと寝具はその色で揃えようね」

ひぃぃ、新生活の準備会話が着々と進行している！

「書斎はもっと広げよう。ちょっと伝手があるから、珍しい本も揃えられるよ」

ものすごく魅力的なお誘いに、心がぐらついたのは仕方ない事だと思うんだ。

お姫様方が到着なさったので、カイト様はお出迎えに行った。私は客間に避難している。ちょっと気まずい（私だけ）話題が中断されたのはありがたいが、これから始まるお茶会のことを考えると、もう……！

あぁ、ギルドに帰りたい。ばっちくてむさくて薄暗いあのギルド

に！　（重症ですね）

あーぁ、アヤメおねーさんどうしてるかなぁ、ちゃんと仕事してるかな。採取品はちゃんと整理してくれてると嬉しいんだけど、きっと山積みにしてるだろうなぁ。

現実逃避も兼ねて、滞っているであろう仕事に思いを馳せていると、とうとう姫君方のお使いがやってきた。

「失礼致します。ルビア姫の使いの者です。お茶をご一緒に、とのことです」

言葉は丁寧だけど態度がものすごくトゲトゲしい。

いや、うん。姫君方の侍女という事はやっぱり下級貴族だもんね。自分と身分が同じか下の娘と、自分のお仕えする姫君がお茶とか、はらわたが煮えくり返ってるのですね、分かります。

「私のような身分のものがご一緒するのは恐れ多い事です」

「姫君が是非に、とのことです」

このやり取りは台本どおり。一回ちゃんと遠慮したけど、お姫様の強いご希望で、という体裁をとるためだ。……実際そうなんですけどね？

連行される囚人の気分で、私は先ほどのサンルームに戻った。

あぁ、捕まった賞金首ってきっとこんな気持ちなんだろうなぁ。今度引渡しの手続きする時は少し優しくしてあげよう。と思った。

（多分私、今ちょっとおかしくなってるんだとおもう）

「あなたがカイトの婚約者ですのね」

思ったより柔らかい口調のルビア様に、私は黙ってお辞儀をした。お許しがあるまでこちらから話してはいけないのだ。

「今日は気楽なお茶会をしにまいりましたのよ。どうぞ遠慮なさら

ないで、普通にお話して下さいな」
　レミア様がにこっと微笑んで椅子に座るよう勧めてくださったので、私は用意されていたカイト様の隣の席に腰を下ろした。うあー、肩が凝るー。

「ふぅん……。もっと強そうなのかと思ったのに」
　リリア様が変なことおっしゃいましたよ！
「リリアったら。ギルドにお勤めとはいえ、冒険者のみなさんとは違うのよ。ごめんあそばせね、クミさん。気を悪くなさらないで」
「いえ、そんな」
　皆様、私がギルド勤めしてることまでご存知なのか。もうちょっとこう、軽蔑されるかと思ってたんですけどね。貴族の娘が働くなんて！　とか。興味深々だけど好意的みたいだ。

「自立しているなんて素晴らしい事だと思います。これからは女性も強くあるべきです」
　強い女性代表みたいなルビア様に褒められた。そっか、ルビア様は女だてらに政治にも積極的だからな。男社会に進出する女性、という括りにされたのだな。
「口さがない者たちもいるでしょうけれど、わたくしたちは貴女の味方です。それだけお伝えしたかったの」
「……もったいないお言葉でございます」
　そして、紅茶も喉を通らないお茶会は終了した。

　外堀が埋まっているなぁ。どうやって逃げたものかなぁ。と現実逃避しながら家に帰り、夕食もとらずに寝てしまった。

ぐぅ。

　えーっとですね。最近母が、やたら光山君に好意的なんだよ。い

つの間にか知り合っちゃったようでね、彼のお母様と。
最初はジムでよく会う顔見知りだったのに、だんだんと仲良くなって、今はランチする仲なのだそうだ。で、子供の学校がたまたま一緒だと聞いて、さらにクラスまで一緒で、そういえばその苗字聞いたことある！　みたいになっちゃって。

それでまぁ、盛り上がってしまったようなんですよ。迷惑な話だよな。
だからこんな夢みちゃったんだってば！

違う、絶対違うぞ。あっちの私が本物で、私が彼女の夢だなんて認めないからね。私が本物だもの！
と、ベッドのうえでゴロゴロ身悶える私なのであった。
やっぱり封印、するべきかぁ……。

とか言いつつ、変なところで負けず嫌いの血が騒いだ私は、まだまだ頑張っていた。だって、考えてみたらどっちが現実の私なんだとしても、生きている限りは物語りは続いてしまうものだ。
だからラスボスまで来て止めるなんて、そんなことできない！
懲りないんですよ、すみませんねぇ。（ぴこぴこ）

えいっ、このっ、いい加減っ、勝たせてー！ぁ……。寝よう。

ぐぅ。（不貞寝）

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさんの助手である。
本日、職場に復帰いたしました。ええ、帰って来ましたよ。お給料頂いている身なのでね。
そう簡単に職場放棄できません、と言ったら、うちの両親は「そ

れもそうか」と納得してくれたのです。こういうところは理解があるよね。ありがたやありがたや。

さて、今は昼。アヤメおねーさんが山積みにしていた採取品を朝から分別して（一部は残念な事になっていたので、アヤメおねーさんの査定表にちゃんとその旨書いておいた）やっと人心地付いた所だ。うぅ、肩凝った。

ギルド内にお客さんがいない事をさっと確認してから、椅子に座ったまま思い切り伸びをする。ぐーっと伸びて、そのまま３０秒……。（うにゃーっ）

「クーちゃん、見えてる」

ぐにっ、と胸を鷲づかみにされて、驚きのあまりひっくり返りそうになった。せくはら、せくはら！

「アヤメさん、なんてこと……！」

「だって、ボタンの間から全開で見えてたんだもん。弾けそうだったし」

いや、うん。ギルドの制服のシャツ、ちょっとキツいからね。普段は気をつけてるんですよ？　でもほら、お客さんいないからちょっと油断してました、すみません。

「もー、お嫁入り先が決まってるからって、気を抜いちゃだめよぉ？　変な噂立てられたらどうするの」

たかが伸びをしたくらいでどんな噂が立つというのかも気になるところだが、私の嫁入り先が決まっているというのはどこからの情報だ？

「なんだか、変なお嬢様がそこらじゅうで聞きまわってるのよ。『カイト様の婚約者の座を私から奪ったクミ・モリサワはどこにいるの？』って。……クーちゃん、今町の女の子たちから賞金首みたいな扱い受けてるわよ」

ひいいいい！

「と、いうわけで、ケセラン様のとこにあなたの護衛依頼出しといてあげたから。行き帰り送ってもらえるように。あ、護衛費は組合の保険からおりるようにしといたから。だからぁ」

アヤメさんはにこっと笑ってさっき私がコッソリ書き込みをした査定表を取り出した。

「このマイナスは、消しちゃっていいわよね？」

「浅はかな私をどうかお許し下さい」

アヤメさんは、いいのよ、といいながら、マイナスに一本付け足してプラスに直していた。……この人には一生勝てないなぁ、と思った。流石は年の功。

あれ？　アヤメさんって、私と同い年だったような。あれぇ？

……まぁ、いいか。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

四月馬鹿の後悔（エイプリールフール限定拍手お礼改稿＋α）

私はさっきから壁の一点をじっと見つめている。

じぃぃぃぃ〜〜〜〜。

別に、なんの変哲もない私の部屋だ。部屋の南にはバルコニーがあって、この時間は優しい月の光が差し込んでいる。東の窓は鎧戸を閉め、カーテンを下ろしてある。北側には廊下に続くドアがあって、そちらには今のところ全く用がない。

私は、西側の壁に掛かっているカレンダーをベッドの上に座りこんだまま見つめている。

「4月、1日……」

4月1日。エイプリールフール。なんだかとてつもない嘘をつかなくてはいけない使命感にかられる日だ。

もう日付は変わってしまった。卒業してから高校時代の知り合いにはこちらから連絡をとったことはないから、こんな日にいきなりメールなんて送ったら怪しまれるだろうか。いいや、しかし！

しかし、やらねばならないのだ。だってエイプリールフールなんだもん。やらなきゃこっちがやられるのだ！（被害妄想）

私は意を決して、メールをぽちぽちと打ちだした。朝6時に送信するようにセットしてぇ。うふふ、反応が楽しみだ。

たっぷり朝寝坊をして満足した私は、被害者たちから届いていたメールをニヤニヤしながら開いていった。

一番乗りは水橋さん。なるほど、テニス部の朝練で早起きし慣れてるのね。

Ｆｒｍ：水橋　奈々枝
Ｓｂ：びっくりしたよ！

おはよう！
もー、すごくびっくりしたんだから（＜｜＞）
下にスクロールするまで完全に信じちゃってたよ（^｜^；）
良いエイプリールフールをありがとう。

騙されてなおかつ「ありがとう」と言える彼女は菩薩様のようだ。拝んでおこう。（なむなむ）さて、お次は……。

Ｆｒｍ：氷見　良子
Ｓｂ：あり得ると思った

おはよ。
朝からやってくれたね。
最後の文章に気付くのがもうちょっと遅かったらくるみとアキに電話するとこだったよ！
いやぁ、でも残念。
ほんとだったら良かったのになぁ（，｜、）

信じてもらうために送ったメールなんだけど、あり得ると思われたのがなんだかショック。いや、いいんだけど、私が悪いんだけど。

まぁいいや、気を取り直して次、次。

Ｆｒｍ：根岸　きらら
Ｓｂ：気をつけないと

おはようございます。
すっかり騙されるところでした。仕返しはさせてもらうから覚悟してね？
それにしても盛沢さんって、ネタの為には身体を張るタイプなのね…。
３年も付き合いがあったのに意外な一面でした。
でも、ネタの選択は注意しないと、また大変な事になるんじゃない？
おもしろかったけど。

えーと、「覚悟してね」とか「また大変な事に」っていう所がちょっと怖い。すごく怖い。……あとで謝っておこうかな。間に合うと良いんだけど。

Ｆｒｍ：由良　明子
Ｓｂ：喜んじゃった

もー、ぬか喜びだった。
おはよう。
ヨーロッパに行けるんだと思って、早速トランク

を引っ張り出すところだったよ。
スクロールが長いなぁ、って気が付いて良かった。
いつか、本当になったら絶対行くからね？

これ、どう見ても目的と過程の重要度が逆転してるよね。内容のおめでたさではなく、外国に行けることに喜んだね？　旅行、行きたかったのかな。

ともかく次で最後だ。あの慌てものの瀬名さんがどう引っかかってるのか、楽しみで楽しみで。（わくわく）

Ｆｒｍ：瀬名　くるみ
Ｓｂ：きゃー！

ええっ、どうしようどうしよう！
とりあえずおめでとう。
でも、光山君はどうするの？
もちろんそういうのは本人の意思が一番大事だけど、ちゃんと話し合った方がいいと思うよ？
ごめんね、私が口出しする事じゃないのは分かってるんだけど。
でも、ええと、是非出席

させていただきます！

……うん。私、いい仕事した。見事引っ掛けたよ。しかもまだ気付いてないよ。瀬名さんたら、なんて微笑ましいうっかりさんだろう。このメールは保存決定だね。

ところで、この返事はまるで私が光山君とお付き合いしてるみたいじゃないか？　そりゃぁ、好きだとは言われたけど。異世界での婚約は有効らしいけどいやしかし！

そういえば気長に待つって言われたけどいつまで待つつもりなんだろう？　待たれるとプレッシャー感じちゃうんだけど。できれば私に気付かれないように待っててくれたら嬉しかったんだけどな！

……な～んて都合のいい事を考えていたら、携帯から『森のくまさん』が鳴り響いた。

なんというタイミングだろう、これは光山君だ！　まさか私の思考が洩れてた？　流石に勝手過ぎましたごめんなさい！　心の中でぺこぺこ謝りながら、おそるおそるメールを開いた。

Ｆｒｍ：光山　海人
Ｓｂ：結婚するって？

今朝瀬名さんからメールが来たんだけど、春休みに知り合った留学生と結婚してイギリスに行くんだって？
オレ、そんな話聞いてないんだけど。
よくもまぁ、そんなこと考え付いたものだね？

いい機会だからちょっと
話し合いたいな。とりあ
えず、今日家に行くから。
逃げないでね？

血の気が引いた。いや、もう条件反射で。だってなんか怒ってるんだもん！　怖いよ！
そして畳み掛けるようにもう一つメールが。

Ｆｒｍ：竜胆　宗太
Ｓｂ：なし

根岸から聞いた。
結婚するそうだな。
おめでとう。
式には行けそうもない。
幸せになって欲しい。

……ね、根岸さんんんん！　ちょっとなにそれ、なんで竜胆君巻き込むの。今の彼には特に結婚ネタは鬼門なのに！　あと、なんで式への参列のお断りまでされてるの。一体どんなアレンジして送ったの？

えーっと、とにかく予想外の所に飛び火したようなので、何とかしなくてはいけないよね。光山君はなんだか怒っているようだし、竜胆君はまた卒業式のときみたいにショックを受けている気配がする。だめだ、さすがに良心がうずく。
　というわけでまずは竜胆君から。（光山君はしぶとそうだし）腹をくくって電話を掛けてみた。

ぷるるるる、ぷるるるる、ぷるるる、ぴ。

「……はい」
「あ、竜胆君？　突然ごめんなさい。今、時間いい？」
「いや……かまわない」
「えっと、メールの件なんだけど」
「もともと盛沢には好きな相手がいるらしいのは知っていた。気にしなくて良い」
そんな嘘っぱちまだ信じてたんだ！　ていうか信じてなおプロポーズしたんだ！　すごいな、竜胆君。惚れそうだよ、もうちょっと時間くれれば。
「や、そうじゃなくて」
「あぁ。済まない、余興は誰か他のやつに……」
余興？　私が彼に余興を頼みたがってることになってるの？　あらゆる意味で鬼か。根岸さん鬼か。この鬼！

「違うの、それは根岸さんの冗談！　元はと言えば私の冗談から始まったんだけど、とにかく嘘なの！」
「……嘘？」
「エイプリールフール。今日、４月１日でしょう？　それで……」
「嘘、だったのか？」
すみません、ある意味全て嘘でした。多分竜胆君の中の私も虚像です。よくわかんないけど大和撫子みたいに思ってるんだよね？
「そうなの。結婚なんてできないって言ったでしょう？　あれはつまり竜胆君が嫌いだとかじゃなくて、早すぎるって言いたかったの。言葉が足りなくてごめんね？」
「……嫌いじゃ、ないんだな？」
「う、うん」
「そうか。なら、いい」
「うん、あの、変な誤解させてごめんなさい。じゃぁ、またね？」

「あぁ」

ぷち。ぷーっ、ぷーっ。

ふぅ。胸のつかえも取れて非常にスッキリした。あぁ、もっと早く誤解を解いておけば良かったなぁ。お付き合いするかどうかはともかく彼はなんというか、癒しなんだよね。安心する。これでもう気まずさとおさらばだ、やったね！　と気分がやや向上したところで、さぁ次。

恐る恐る、光山君に掛けてみる。どうか、どうかまだこちらに向かっていませんように！

ぷるるぴ。

取るの早っ！

「やぁ。そろそろ掛かってくると思ってたよ」

あれ、思ってたほど怒ってないよ？　むしろ上機嫌だけど……は！

「まさか、あのお怒りメールは」

「うん、エイプリールフールだからね。びっくりした？」

きいいいい、やられた！

「まぁ一瞬ビックリしたし、流石にちょっとカチンときたんだけどね。オレへの返事も保留でそんなこと言い出すなんて。でもすぐに気付いたよ」

バカバカバカ、私のバカ。この人があんなにアッサリ引っかかるわけないじゃん！　なに焦って電話してるんだよぉ。

「瀬名さんの勘違いは解いてないから、早めに連絡した方がいいよ。かなり本気にしてたから」

「……ハァイ」

ぷち。ぷーっ、ぷーっ。

思わずさようならも言わずに切ってしまったけどいいや。ヤツも私を騙せて満足しただろう。こうなるのが嫌だったから彼をイタズラの対象から外したのに、瀬名さんめぇ。（自分でまいた種だけどさ）

さて、このあと瀬名さんから発信された情報がめぐりめぐって篠崎さんやら手越さんやらに尾ひれ背びれ付きで辿り着き、本気にした彼女たちが我が家に押しかけてきて一騒動あったりしたのだが……。それはまた、別の話。（ということにしておきたい）

教訓：エイプリールフールの嘘は、明らかに嘘と解るものに限る。

うわさばなし。

盛沢さんについて？

まぁ、いいけど。どんな事が聞きたいの？

……そうね、彼女と同じクラスになったのは今年が初めて。でも、噂はよく耳にしたかなぁ。たとえば、「おうちはお金持ちらしい」とか「成績優秀」とか「口がかたい」とか。有名ね。あとは、ちょっと悪意を感じるようなのもあったかな。「学校の理事にコネがあって、先生から贔屓されてる」とか、「あの胸は実は豊胸手術によるものだ」とか？

それから、「ボールは絶対持たせないほうがいい」っていうのは、一緒に体育をすれば一目でわかるから、これは噂と言っていいのかしら。

そんなことが聞きたいんじゃないのね？　うぅん、じゃぁ、ちょっと変わった噂といえば……。「親の決めた婚約者がいるから恋人が作れない」っていうのは聞いたことある？　あぁ、やっぱりこれはマイナーだったのね。

くるみがどこかから拾ってきた話なの。あの子ったらすぐに噂に振り回されるんだから。しかも最後まで聞かないし。困ったクセよねぇ。良子みたいに「それはそれで面白い」って言えればいいんだけど、どうも私には付いていけない時があるのよね……。だから本当のところ、元の話がどうだったのかは分からないんだけど……。ねぇ、私より良子に聞いたほうがいいんじゃないかしら？　あぁ、そう。みんなに聞く予定なの？

うぅん、なにせくるみが聞いてきた事だから。なんでそんな話が

出てきたのかはわからないかな。
流石に同じ学年でそんな特殊な境遇の子がいるとなると興味もわくものでしょう？　良子なんてわざわざどんな子なのか見物に行ったのよ！　まったく、なんでも面白がるんだから。

これは私が勝手に考えた事なんだけど、ほら、盛沢さんって可愛いじゃない？　癒し系だし。そんな彼女にどうして恋人がいないのかなぁ、っていう話題が出た時に、「お金持ち」っていう噂と結びついて、誰かが適当に「婚約者でもいそうだよねー」なんて言ったんじゃないかと思うの。
そういう無責任な言葉を誰かがさも真実みたいに作り変えたんじゃないかなぁ、って。
……まぁ、面白いけど。

彼女の不幸な所は、そんなお話でも何故か全否定されにくい所よね。ほら、何て言ったらいいのかしら……。浮世離れしてる？　そう、浮世離れしてる感じじゃない？　だから、そういうちょっと変わった話も「もしかしたら」って思えちゃうのよねぇ。

でも同じクラスになってから大分印象は変わったわ。……えーと、そう、あの、お花をね？　盛沢さん、お花をいっぱい教室に持ってきてたでしょう？　あんまり綺麗だったから、お庭が見たくなって話しかけたの！
最初ちょっととっつきにくい感じだったんだけど、というか、なんだか警戒されてるような感じだったんだけど……。いろいろやっかみを買いやすい人だから、人間不信気味なんじゃないの？

まぁ、そうなのよ。打ち解けちゃえば話しやすいし、すごく器の大きな人だなぁ、って分かったの。……信じられないような話でも受け入れてくれるし。いいえ、こちらの話。

果物が好きみたいよ？　特に苺。よく苺牛乳買ってるしね。あら、知らなかった？　かなりの頻度で買ってるわよ。

あとは、そうねぇ……。残念ながら、誰が好き、という話はしないかな。うんうん、分かってる。もともとそれが聞きたかったんでしょ？　光山君との関係ね。やっぱり、みんな興味深々なのねぇ。

でも、あれは微妙な所だと思うな。良子がそのことで盛沢さんをよくからかうんだけど、結構ムキになって否定するの。だから、全く意識してないわけじゃないとは思うんだけど。そもそも盛沢さんって、あんまり男の子を意識した事ないんじゃないかしら？

そうそう、免疫なさそうよね。他人の恋愛相談なんかにはのってるみたいだけど、自分の事となると全くダメなんでしょうねぇ。無意識なのかわざとなのか、避けたがってるんじゃないかな、って思うの。だからこそあの「婚約者がいる」っていうお話も、もしかしたらあり得るかなー、って。

光山君のほうも、なんだかなぁ、って思うんだけどねぇ。構い方が悪いのよ。彼とは去年も同じクラスだったんだけど、今年になってかなり意外な一面を見た気がする。彼って、好きな子には意地悪しちゃうタイプなんじゃない？　案外子供だったのね。

盛沢さんみたいな子には、もっと正攻法で行くべきだと思うんだけど。いきなり近付き過ぎたせいで警戒されてるんじゃないかしら？　え、そうなの？　あれは最初から？

……変なの。盛沢さんって、王子様っぽい人が好きそうなのに。難しい人なのねぇ。

とにかく、私より良子に聞いたほうが絶対詳しいから。……くる

みはお勧めしないわ。というより、くるみに聞いたりしたらあの子がまた何か誤解して騒ぎになるからやめてあげて。盛沢さんがかわいそうだから。お願いね。

「でも、そういえば米良さんって、盛沢さんと同じ中学出身じゃなかった？」

「うん、そうなんだけど、やっぱり新しい視線からも見てみないと良い作品がかけないかなって！」

「作品？」

「うん。できあがったらクラス会にでも持っていくから、由良さんも読んでね」

「……盛沢さんにはみつからないようにね」

「大丈夫。もうバレちゃったから」

「可哀想な盛沢さん……」

「この作品でデビューするんだ！」

「っ！　可哀想な盛沢さんっ！」

「がんばるぞーぉ！」

盛沢　久実に関する考察

根岸　きらら

1.　はじめに

3年L組。このクラスで、私は大変興味深い人間模様を観察する機会に恵まれた。その中心と見なされる「盛沢　久実」という人物は、交友関係の狭い私にとって数少ない友人の一人である。

私のもとへ彼女の人となりを問い合わせに来る人々のために、彼女を分析した結果を以下に記す。

2.　盛沢　久実から受ける印象

盛沢　久実という人物は非常に複雑である。彼女は数多くの矛盾を内包しており、それらを全て、半ば諦めるかのように自分の中で共存させているからである。これは彼女の優柔不断で八方美人な性格故にやむなく生じた特性であり、また、この先も葛藤し続ける要因となるであろう。

彼女は、傍目から見ればかなり恵まれた条件をいくつも持っている。容姿、頭脳、生家の経済力などである。残念な事に運動神経には恵まれなかったようではあるが、ある意味その点さえも一部の男子にとっては「萌える」ポイントとされているため、完全なマイナス要因とは言えまい。

けれども彼女は必要以上に自分を卑下している傾向がある。もち

ろん、前述の利点はきちんと自覚しているにも関わらず、だ。それはなぜか。この謎を追求するにあたり、彼女にある種のトラウマを植えつけた過去の存在を疑わずにはいられない。

3．　過去の盛沢　久実について

私が彼女と知り合ったのは高校の文芸部に所属してからであるが、聞こえてきた噂によると、中学校時代の彼女は少々荒れていたようである。二年生の時に所属していたクラス全体が荒れていた、という情報もあるので一部悪意的にゆがめられている可能性はあるが、所謂不良と呼ばれる人々と交流があったのは間違いがないようだ。

たまにぎょっとするような知識（詳細は省くが、あまり感心できる内容ではない）を持っており、情報の出所を聞くたびに「中学の時、ちょっと……」と遠い目をして誤魔化される。もっとも、「お金をばら撒いて不良を手懐けていた」などという噂は、事実無根の中傷である。彼女はあの八方美人さだけでそのような友人達との距離をうまく調整していたのであろう。

高校に入ってからの彼女の日常も、残念ながら平穏であったとは言えない。聞こえてきた限りにおいても、彼女の所属するクラスでは刃傷沙汰及び警察沙汰がそれぞれ2回、確実におきている。多感な年頃にこのような事が繰り返されると、一種の人間不信に陥るのではないだろうか。

つまり、周りで起こっている出来事から一歩引いて、場合によっては「私が関わって良い事じゃないから」とうつむくあの仕草は、そうすることで最悪の事態から身を守ろうとする自衛手段として身につけたものなのではないだろうか？　とすれば、あの一見頼り無さげに眉を寄せる表情こそ、彼女の本能が危険を嗅ぎ取った合図なのだと考える事ができる。

4．　現在の盛沢　久実について

彼女の現状を語る上で光山　海人の存在は欠かせない。むしろ、このようなレポートを書く事になったのも、彼が堂々と盛沢　久実に関わるようになったためなのであるから、少々脱線するが彼についても考察しなくてはならない。

加えて、竜胆　宗太が彼女に好意を抱いていることも、知らぬは本人ばかりで周知の事実だったので、彼についても考察する。

結局人々の興味は、盛沢　久実にこの両名を取られるかどうか、に尽きるからである。

4－1）　光山　海人について

一言で言うならばミスター・パーフェクトである。顔良しスタイル良し、文武両道で家柄も良し、ついでに大人からのうけも良し。彼について文句などつけようもない。

その事は重々承知であるが、一年生、二年生時の盛沢　久実による彼の評価は「完璧すぎて胡散臭い」であったことは特記すべき事項であろう。

盛沢　久実自身はどうやら気が付いていなかったようだが、彼は早いうちから彼女に目をつけていたのではないか、という説がある。（参考資料？及び？を参照）

資料によれば、彼は盛沢　久実が図書カウンターの担当である日に限り、図書室に通っていたそうである。確かに言われてみればそのような気もするのだが、これに関しては噂の域を出ない話なので残念ながらはっきりと断定はしかねる。

少なくとも彼の盛沢　久実に対する態度は何らかの好意の存在（ただし私には、恋愛よりもペットに対するものに思えたが）を感じさせるものであった。事実、あまりにも有名な卒業式後のお別れ会における告白劇（大変遺憾ながら、私はその場面を見逃したのだが、参考資料？で確認した）がそれを裏付けている。

しかし、盛沢　久実本人による彼の評価はさほど変わっていないようなので、今後の展開は彼の一層の努力がなければ期待できない。

４－２）　竜胆　宗太について

こちらは一言では説明し辛い人物である。無口、無表情で何を考えているのか、むしろ何も考えていないのかどうかも判断し難い。光山　海人ほどではないが背が高く、筋肉が付いている。そして無表情なので誤解を受けやすいらしい。たまに不良に難癖をつけられている。一方で、「包容力がありそう」と一部の女生徒に人気が高かったのも面白い点である。

また、意外に小動物に好かれるようで、学校の裏庭で猫にたかられて困っている姿の目撃談などもあがっている。（参考資料？より）彼自身、小動物は好きなのだが腕っ節の強さゆえに力加減が分からず、傷つけてしまわないかと心配して直立不動になるようである。

彼の盛沢　久実に対するぎこちなさは、この辺から来ているのではないかと推察する。

彼にとっては、盛沢　久実が大層か弱いお嬢様に見えるようで、（彼と比較したら大抵の女の子はか弱いだろうと思われるのだが）彼女が少し重い荷物を持っているのを見た途端そわそわし出すので大変分かりやすい。実際の盛沢　久実は、女子の平均よりも高めな握力と、たまに発揮されるとんでもない腕力というか瞬発力を持つのだが……。

聞くところによると彼の盛沢　久実に対する告白は不発に終わったようだが、少なくとも、今まではせいぜい「お気に入りの木」くらいにしか思われていなかったのを、「自分に好意を持つ男子」にまで格上げしたのだから快挙であるとも言えよう。今後の展開に期待している。

４－３）　改めて、現在の状態について

三学年で一気に目立ち始めたように本人は考えているようだが、

実のところ盛沢　久実はもともと噂の多い人物であった。ただ、今までは本人の耳には入らないところで情報がやりとりされていたのに、上記二名の男子の好意が表面化したために、本人に対する嫉妬や興味が顕わになっただけのことである。

彼女は、自分を取り巻く状況が変化しつつある事を自覚しながらも、未だ自らが変わることを拒み続けている。言うなれば、ヤドカリが、身体が大きくなったのにまだ古い殻に固執して引越しを渋っている状態である。

いずれその殻が壊れた時、彼女がなにを選択するのかは興味深いところではある。

しかし、彼女を見る限り、まだまだその時は先のことであろう。

5.　まとめ

実際知り合ってみれば、盛沢　久実という人物は、気が強く、常に物事を観察し、計算して行動していることが分かる。つまり、彼女は意識的なのか本能によるものなのかは定かではないが、大人しそうな演技で身を守り続けているのである。

結局、盛沢　久実自身が、全てに対して消極的態度を崩さない限り具体的な進展などありえないので、上記男子両名を狙っている人々は過剰に心配しなくても問題ないと言える。今まで通り、それぞれにアプローチを続けるべきである。

或いは、盛沢　久実を参考に、より彼らに好かれる努力をするというのも一案ではあるがあまり勧めない。あくまでも真っ向勝負で行くべきである。

また、彼女に必要以上の嫉妬をしてあまつさえ行動に移すのは賢い選択ではない。何故なら、盛沢　久実はああ見えて復讐はきっちりするタイプであり、結果として悪行が目当ての男子の耳に入るのは必然だからである。こうなっては本末転倒である。

理性ある行動、これこそが、人間にとって必要な指針なのである。

6.　参考資料

?「姫事～ひめごと～」　千ノ宮　桃后　著
?「姫事の秘め事（設定資料集）」　千ノ宮　桃后　著
?「盛沢さんについて」　水橋　奈々枝　著
?「お別れ会　クラス３－Ｌ」　３年Ｌ組有志による録画

――――――――――――――――――――――――――――――――

「根岸さん、これは……？」
「あなたに関するレポートよ。採点して」
「なぜ私が！」
「あら、自分について何を書かれているのか、気にならない？」
「いや、そもそもなんでレポートにされてるかの方が気になるかな……」
「最近、色々聞かれるのよ」
「なにを？」
「あなたと、あとはまぁ、あなたを巡る男子について？」
「めぐってない」
「それで、いちいち答えるのも面倒だし、本人のいないところで話すのもどうかと思ったから。先にあなたに内容を把握しておいてもらって、聞かれたらこれを渡す、という形にしたいの」
「フェアなんだか残酷なんだか！」
「効率的、と言って頂戴」
「うぅ、明日までには読んでおきます……」
「……そういう律儀さが、つけこまれる一因なんでしょうねぇ（ぼそっ）」

盛沢　久実に関する考察（後書き）

＊千ノ宮　桃后（せんのみや　とうき）＝米良　桃果さんのペンネーム

ある日のアフタヌーンティー

「あ、そうそう。はい、お土産」

光山君が当然のように我が家のソファーに座って紅茶を飲んでいる。白い革張りのソファーに、まぁ似合うこと。こうやってヤツが座るためにあつらえた品にしか見えない。なんてことだ！　な～んて、侵略の恐怖（被害妄想）に怯えていると、彼が可愛らしくラッピングされた本のようなものを差し出してきた。なんだこれ。

「穂積さんの国で、子供用に推奨されてる本だよ。なかなか興味深かったから」

「推薦図書みたいなもの？」

「まぁ、そんなかんじ」

綺麗な絵本だなぁ。多分木版印刷？　私があっちに滞在してた時は、確か本は全て手書きの写本だったはずだけど。うむぅ、紙の質も向上している。穂積さん、生活水準上げにかなり力を注いでいると見た。この分だと、文字だけの本なら活版印刷が始まっているに違いない。

は！　そんなことどうでもいいじゃん。内政ゲームやってるのは光山君であって私じゃないんだ。こんなところに着目する思考回路は危険だ。これ以上ウッカリあの国の事情にまきこまれてたまるものか！

と、警戒したものの、相変わらず有無を言わせぬ笑顔で「まぁ、読んでみて」と言われて、私は逆らえずにその本を読み始めた。最近ますます逆らいにくくなったなぁ。悔しいなぁ。（でも本は好きだからいいや）

＊＊＊＊＊

『月の巫女姫』

かつて、この地はたくさんの国々にわかれ、人々は互いに争い、傷つけあっていました。

それを空から見ていた月神様は大変心を痛められて、御自分の分身であるふたりの姫君におっしゃいました。

「わたしの姫たちよ、どうか願いをきいておくれ。わたしの代わりに下界におもむき、あの地の人々を正しい方向に導いてやっておくれ」

一の姫さまは、毎日昇っては夜の安息を与えてくれる、あの一の月のような方です。彼女はにこりと笑って頷きました。

「おまかせください。あの地に降り立ち、戦を起こす者たちをうち倒してみせましょう」

二の姫さまは、二十日にいっぺんだけ、淡く輝きながら昇る、あの二の月のような方です。彼女もまた微笑んで、頷きました。

「私も喜んでまいりましょう。人々にお話をすれば、きっとわかってくれるはずです」

月神様は大変嬉しく思い、二人の姫君に何か欲しいものは？　とおたずねになりました。

「私は剣が欲しゅうございます」

一の姫さまがそう答えたので、月神様は一振りの光り輝く剣をお与えになりました。

二の姫さまは少し困ってしまいました。もともと、下界に行って争う事など考えていらっしゃらなかったからです。争いをやめるようお話をするだけなのに、一体何を望めば良いのでしょう？

一の姫さまはそんな二の姫さまを大層心配して、代わりに月神様

にお願いしました。
「二の姫には、どうか騎士をお付け下さい。彼女を守り、そして彼女のために戦える騎士を」
月神様も下界の人々の争いを見ていらしたので、気性の穏やかな二の姫はいかにも頼りなく思われて、一番強い騎士に姫を守るよう命じられました。

こうして二人の姫さまと一人の騎士は、一番大きな国に降り立ちました。
一の姫さまは言いました。
「私は旅に出て、人々を導く事にします」
二の姫さまは言いました。
「私はこの国に残って、人々に争いをやめるようお願いしてみます」
二人はお互いの無事を祈り、お別れしました。

旅の空の下、一の姫さまは考えました。
「この地の人々は互いに争ってはいるけれど、心の中では戦に飽きている。さて、どうしたものかしら」
悩みながら歩いていると、黄色い髪の傭兵がむこうからやってきました。彼は大変苦悩している様子だったので、姫さまは思わず声をかけました。
「あなたは何をそんなに悩んでいるの？」
傭兵は言いました。
「戦が長引き、民たちは飢えに苦しんでいます。先日とうとう、私の生まれた村もなくなってしまいました。なんとか争いのない世界にならないものかと悩んでおります」
「それならば私についてきなさい。必ずや平和な世をつくってみせましょう」
傭兵は喜んでお供になりました。

一の姫さまと傭兵が連れ立って旅をしていると、赤い髪のたくましい男がやってきました。彼はある国の王子で、武者修行の旅で世界を回っている途中でした。
「私はただ強くなることだけを求めて修行をしてまいりました。しかし、ふと気が付いたのです。この力をもっと人々のために役立てるべきではないのかと」
「それならば私についてきなさい。あなたの力を役立ててあげましょう」
王子は喜んでお供になりました。

一の姫様と傭兵と王子が連れ立って旅をしていると、青い髪の神官がやってきました。
「私は月神様に仕える神官です。姫さまのお役に立ちたくて馳せ参じました」
「それならば私についてきなさい。月神様の御心にかなう国をつくりましょう」
こうして一の姫さまは、三人のお供を連れて旅を続けることになりました。

一方、二の姫さまと月の騎士は、降り立った国の王宮に丁重に迎えられました。この国の人々は月神様への信仰が篤く、自分達の国に月の姫さまがいらした事がうれしくてたまりません。毎日王宮に詰め掛けて、口々に姫さまの清らかな可愛らしさを褒め称えました。

けれども二の姫さまは、日が経つにつれ沈みがちになっていきました。なぜなら、人々は浮かれるばかりで誰一人姫さまのお話を聞こうとしなかったからです。
「この地が戦で乱れるたびに、月神様も太陽神様も、等しく心を痛めておいでですよ」と、どんなに訴えても、
「なればこそ、一日も早く我らの敵を滅ぼしてしまいましょう」と

皆が答えるからです。

月が昇るたびに悲しそうなお顔で空を見上げる姫さまを、騎士はとても心配していました。少しでも姫さまのお気を晴らそうと、宮中で聞いたおもしろいお話しやら、月神様の世界にはなかった珍しいお花で気を紛らわせてさしあげようとしましたが、姫さまは少し笑って「ありがとう」とおっしゃるだけで、やはり寂しげなため息をつくばかり。

お城の人々も姫さまの様子を心配して、美しいお着物や豪華な髪飾り、珍しい果物などをこぞって差し出しました。それらに姫さまは微笑んでお礼を言いましたが、やはり気分は沈んだままのようでした。

「私にはこんなに親切にしてくださるのに、どうしておなじ人間同士で傷つけあうのでしょう」

「地上の者達は、自分と違うものを嫌うようです。きっと、全て同じにしなくては気が済まないのでしょう」

騎士は答えました。彼は、愛しい二の姫さまから笑顔を奪ってしまったこの地上をすっかり嫌いになっていたのです。

ある日、兵士たちが突然姫さまの部屋にやってきました。率いていたのは、姫さまに何度も結婚を申し込んでいた貴族でした。彼は愛しい姫さまを力づくで手に入れようと、恐ろしい事に反乱を起こし、国ごと乗っ取ろうとしたのです。

「さぁ、姫君。この城の人々の命を助けたければ、私の妻になりなさい」

けれども、姫さまが震えながら頷くより早く、騎士が姫さまを抱きしめ、言いました。

「姫、これ以上あなたをこの地には置いておけません。二度とこの

地のために煩わされる事のない場所にお連れします」
そうして、部屋の中が真昼の太陽よりも眩しい光に満たされたかと思うと、もう、お二人の姿は消えていました。騎士が二の姫さまを遠くの世界にさらって行ってしまったのです。
以来、二の姫さまと騎士を見たものはおりません。

一の姫さまは、二の姫さまと騎士がどこか別の世界へ行ってしまったのを感じ取って嘆かれました。
「あぁ、あの優しい二の姫のやりようではこの地に平和などもたらせないのだわ。私はやはり、剣をもって道を切り開くことにしましょう」

月神様からいただいた剣はとても不思議な力を秘めていました。決して折れず、どこにあっても持ち主の呼びかけに応え、切れぬものはなく、また、持ち主が切りたくないと望めば相手を傷つけることなく倒してしまうのです。
この剣の力を借りて、姫さまはあらゆる戦をとめてまわりました。

あるとき姫さまは太陽の神子様と出くわしました。なんとうれしい事に、太陽神様も地上の人々の争いを憂いて、御自分の神子様に平定をお命じになっていらしたのです。
姫さまは神子様に言いました。
「太陽神様も月神様も、地上の様子に心を痛めておいでです。私たちが力を合わせて、世界に平和をもたらしましょう」
神子様は、姫さまのあまりの美しさと気高さにお心をすっかり奪われて、共に平和な国をつくろうと誓いました。

一番の憂いの元であった、それぞれの信仰ゆえの争いが、この事によって収まりました。そうして、お二人は結婚し、現在の国をつくりました。

全てを成し遂げたあと、一の姫さまと神子様はこの地に残り、人々を正しく導く事にしました。ですから、私達は安心して太陽と月、二柱の神様の恩恵を受け、幸せに暮らせるようになったのです。
きっと、これからもずっと……。
＊＊＊＊＊

……びみょーな気分になった。多分一の姫が穂積さんで、二の姫が私で、騎士は光山君なんだろうけど。なんかこう、ええと、痒い？　そう、心臓の裏が痒い。久々に。たぶんこれ、部屋に一人きりだったら一通り端から端までゴロゴロしたとおもう。
さては、この微妙な気恥ずかしさを堪える私を見たくて読ませたんだな？　趣味わるっ！

天孫降臨に桃太郎、かぐや姫。あとは……なんだろう。作者不明って、どう考えても穂積さんが関わってるよね？　こっちの話をうろ覚えで、滅茶苦茶に混ぜて書いたんだよね？　って、ゆーか……。
「騎士様、悪役っぽい……」
「うん、ちょっとグレーゾーンだよね。月神様のもとにさえ返さないところが」
しかも本人満更でもなさそうだし！
……この点をこれ以上つつくと、なんだかやぶへびになりそうな気がするので話題を変えよう。うん、そうしよう。

「えーっと、そういえば月って二つもありましたっけ？」
「あったよ。一度だけ昇ったの、覚えてない？　せっかくだからお月見でもしようと誘いに行ったんだけど……熟睡してたね」
わるかったな！　だって夜は寝る時間だもの。ほんと、かぐや姫じゃあるまいに、毎晩月を眺めてしくしく泣いていられるか。
「で、結局この本は何が言いたいんでしょうね？」

「穂積さん達がわりと力ずくで帝国作った理由を正当化するのと、あとは信仰の統一が目的じゃないかな？」
生々しいな！　いや、でも歴史ってそんなもんだよね。穂積さんたら、すっかり立派な為政者になったんだなぁ。絵本からしてこうなら、大人向けはもっとすごそうだ。

あ、そういえば。
「そういえば、二の姫に言い寄った貴族ってユーシウス殿下の事？　王族の身分剥奪されたってことですか？」
「あぁ、彼は確か行方知れずじゃなかったかな」
衝撃の事実！　私の脇役仲間がそんな不憫な事になっていたなんて、想像も……してた。うすうす、そんなことになってるだろうと思ってた。うん。だよねー、脇役だもんね。使い捨ての。（けっ）

「歴史なんてそんなものだよ。……気になる？」
そりゃぁ、脇役同盟（仮）を結んだ仲だしね。私、一回仲間と認めた相手には情が深いんですよ。
しかし、だ。
「二度と彼のために煩わされる事のない場所につれてってあげようか？」
と、ニヤリと笑って身を乗り出した光山君を目の前にしては、首を横に振るので精一杯。
やっぱり彼は、わるいまほうつかいだとおもうの。

……なんとなく身の危険を感じた、ある日のアフタヌーンティーのできごと。

ある日のアフタヌーンティー（後書き）

……自分でもなにがなんだか。
そのうちヒッソリ消えてるかもしれないです。

なう　ろーでぃんぐ４　（拍手お礼修正＋α）

私の名前はクミ・モリサワ。ギルドの受付のおねーさん……の助手が本職だが、最近実家の両親が帰ってきて結婚しろとうるさい。しかも相手がまずい。

ギルドの伝手を頼って更に逃亡することも考えたがあのカイト様のことだ、どこかから情報を手に入れてしまうだろう。

なんでそこまでして私と結婚しようとするのかは知らんが。そして私も、なぜこんなに彼から逃げたがっているのかがよく分からない。あれ、なんで？

まぁいいや。さしあたっての問題は、街中を歩くのに身の危険を感じるような事態になってしまったということだ。うふふ、どうしよう。

とりあえず珍しく行動の早かったアヤメおねーさんが護衛を手配してくれたそうだが、ケセラン様のところに、というのが若干の不安要素だ。大丈夫かなぁ、誰が来るんだろう。

終業時間まであと１０分、という頃に、ギルドの扉が開いた。反射でそちらに目をやると、そこにはソータ・リンドウの姿。おや珍しいな、いつものパシリはどうしたんだろう、と一瞬思ったけど、違いますね。彼が私の護衛なんだね。

私は初めてケセラン様の采配に感心した。適材適所じゃん！　いつもは、がさつなヒショウ・ナカヤマに芸術品の運搬させたり、愛想を知らないキララ・ネギシを酒場の助っ人にやったり、マダムキラーのイツキ・フクシマをどっかの奥さんの浮気調査に出したり、戦闘力皆無のナナエ・ミズハシに大型動物の捕獲命令したりするのに。

確かこのソータ・リンドウだって、先週ベビーシッターに行ってたはずだ。いや、彼は良い人だよ？　良い人なんだけど、一見無表情で怖いんだって。無口だし。子供の相手には向かないだろう。

でも、私の護衛にはうってつけだよ。今までわざと評判を下げるような人材派遣していたケセラン様も、いい加減心を入れ替えたんだろうか。このままだと仕事が本当になくなって傭兵団が自然消滅するって、やっと気が付いたんだろうか。

「護衛の依頼で来た」

「はい、私です」

彼と口をきくのは引ったくりを捕まえてもらって以来だ。だって、とにかく無口なんだもん。

「お仕事、もうちょっとかかるんです。そちらで待っててください」

適当な椅子を指差すと、彼はこくり、と頷いた。

「すみません、こんなくだらない事で……」

「いや」

女の子のアイドルとちょっと婚約してるだけで、ファンの皆さんから恨まれているおそれがあるので護衛してください、とかな。傭兵団に依頼することじゃないよね。あ、でもケセラン様のとこはこんなのばっかりか。

「ついでに買い物にまで付き合っていただいて」

「構わない」

「しかもあの、荷物まで持っていただいて」

「問題ない」

どうしよう、会話が続かない。単語でしゃべらないで、言葉を惜しまないで！　口先三寸で生きてきた私に、この沈黙はきついんです。

「えーと、先週のベビーシッターはどうでした？」
「……。最終的には、うまくいったと思う」
最初の沈黙は、なにかの後悔とか葛藤だろうか。最終的にはって。どゆこと？
「怖がって、泣きつかれて、寝てしまった」
うわ、ヒドっ。
「それは、傷つきますね」
「慣れている」
なんだろう、この人がすごく不憫に思えてきた。そっかぁ、誤解されやすいんだろうな。話してみると、物静かで良い人なのに。

やがて借りている部屋にたどり着くと、ドアの前に人だかりができていた。なにごと！
なんて考える間もなく、聞こえてきた声に思わずしゃがみこんだ。

「出てきなさい、クミ・モリサワ！　ここに住んでいる事は分かっているのよ！私と勝負しなさい！」
アンジュだよ……。なにあの芝居がかった声。相変わらず目立つの好きだよねぇ、じゃなくて。
「追い払うか？」
「いえ。逃げます」
リンドウがどの程度強いのかはよく知らないのだが、きっと剣の腕は立つのだろう。そんな噂を耳にしたことがある。
しかしアンジュのお付のミドリ・ノジマはかなり体術に長けていたはずだし、そうは見えないがヒカル・ムラヤマは元暗殺者だ。こんなアホどもに付き合って怪我なんかしたらこっちが馬鹿みたいじゃないか。
「とりあえず、キララのところ……は、監視が付いてるかもしれませんね。どこか別な場所に行きます」

「分かった」
反論しない、無駄口を叩かない、状況を見誤らない。この人、護衛としてすごく理想的だよね。その気があるなら父に口利きして引き抜きたいくらいだよ。

身を隠すのによさそうな場所の心当たりはありますか？　と聞くと、彼は少し考えた後、私をある場所へ連れて行ってくれた。

そこは、ある種の別世界であった。この街の夜の顔。つまりは色街というか繁華街と言うか。こんな真面目そうなリンドウがここに躊躇いもなく足を踏み入れた事にビックリした。まぁ、うん、お年頃だもんね。なにも言わんよ、聞かんよ。
「……うちの門下生が、この街で用心棒に雇われる事があるんだ」
あ、私から物分りの良い視線を感じたのか、言い訳してる！　心なしか顔が赤い。何この人、可愛い。
「その縁で、ある闇医者に伝手がある。そこなら、きっと」
なるほど、いかにも身を隠すのに良さそうな怪しい場所ですなぁ。彼の馴染みの娼館とかじゃなくてちょっと残ね……げふげふ。いえ、ほっとしましたよ。

艶やかな客引きのおねーさん達の勧誘をかわし、胡乱な飲食店の脇を通り、明らかに放置してはまずそうな連中がたむろする宿の密集する路地をすり抜けて、やっと私たちが辿りついたのはこれまた大変怪しげな建物だった。
え、ここ？　ほんとにここ？　なんか本当にヤバそうなんですけど。さっきの宿にいた連中がそそくさと目を逸らして通り過ぎてますけど！　ひぃ、よく見たら壁に「タスケテ」とか「ニゲロ」とか書いてあるぅ！
私がドン引きしているのも構わず、リンドウはすたすたと建物の

裏手に回り、知っていないと気がつかなそうな位置にある呼び鈴を鳴らした。すみません、親切に連れてきてくれたご厚意には感謝しますが今すぐ帰りたかったです。
しかし残念な事に、ドアはすぐ開いてしまった。中から顔を出したのは……。
「あっれぇ、ギルドの裏ボスさん？」
モモカ・メラという、採取依頼の常連さんだった。

「あぁ、噂聞いてるよー。親が勝手に決めた婚約者はカイト様だった！　とかおいしい設定だよねぇ」
設定ってなんだ。どうもこのメラさんは、噂話を集めたがる傾向がある。こんな怪しい診療所で薬師として働いていたとは知らなかった。てっきり情報屋でもしてるのかと。

「全く、俺は今大事な実験をしてるんだ。そもそもここは避難所ではないというのに」
闇医者兼、このラボ（と言い張ってるよ、この怪しい建物を）の所長と名乗るリョウ・タキガワ氏がイライラしながらせわしない足取りで、それでも中を案内してくれた。いや、あの、研究内容とかこれっぽっちも興味ないんで。一晩泊めていただけるだけで。
「ともあれ、丁度いいときに来たのだから特別に見せてやろう」

私達はタキガワ所長に連れられ、えっちらおっちらと階段を上り、建物の最上階までたどり着いた。
その部屋は真ん中に巨大なフラスコのような水槽が一つあるきりで、いやに殺風景だった。なんだあれ。ちょうどその真上に、大きな天窓が開いていて、月の光が差し込んでいる。そういえば今日は満月だったっけ。あれ、中で何か動いた？　人間みたいな、なにかが。

「紹介しよう、俺の傑作、ホムンクルスっぽい何か。ハヅキだ」
なんですと！　ホムンクルスは法律で製造が禁止されてるはずなのに！
「問題ない。何故ならホムンクルスではなく、ホムンクルスっぽい何かだからな」
タキガワ所長は全く悪びれずに、胸を張って答えた。あぁ、知らなければよかった。

それから彼は、製造過程の違いやら特殊な能力やらを長時間にわたり説明してくれた。どうやらこのハヅキさんは男女どちらにでも変幻自在で、なおかつその時の性別の「同性」を惹きつける力を持っているそうだ。なんでまた同性なんだろうと思わなくもないが、どうでもいい。むしろ何故そんなこと聞かされなければならんのか。
「君は金持ちの娘なんだろう？　この研究のスポンサーになってくれるよう、ご両親に頼んでくれ」
ここで自分の心に正直にキッパリ断っては今夜の宿を失ってしまう（今から移動するなんて無理。疲れた）ので、引きつりながらも「考えておきます」と答えておいた。

そしてやっとメラさんに案内されて、客室とは言いがたい、むしろ手術室だよね？　という部屋にたどり着いた。いきなり押しかけて泊めてもらう身でこんなこと言いたくないけど、朝になったらバラバラにされてそうな気がする。怖い。真っ青な顔でベッド（手術台）を見つめている私に、ここに来てから一言も言葉を発しなかったリンドウが言った。
「俺が部屋の外で見張っている。安心して休め」
頼もしいんだけど、どう考えても報酬に見合わないよね。流石にそこまでさせるのはちょっと。と遠慮すると、彼は私の頭に手をのせて、頷いた。
「お前の護衛が俺の仕事だ。気にしなくて良い。そもそも、ここに

連れてきたのは俺だ」
その手の暖かさになんだか安心してしまい、私は素直に部屋に入って眠る事にした。
おやすみなさい。

ぐぅ。

朝起きて、部屋の外に出ると何かが転がっていた。何かって言うか、人？　いち、にぃ、さん。三人。なんだこれ？　ドアの少し横に、リンドウが直立不動で立っていた。ほんとに一晩見張っててくれたんだ……。ていうか、王宮の門番か！

「おはようございます。あの、コレ、なんですか？」
「よく眠れたか？」
「えーと、はい、おかげさまで」
実際、なんだか意識が堕ちるように眠ってしまったのだ。なにあのベッド、怖い。麻酔掛けられたみたいにブラックアウトしたよ？

「それで、これは？」
積み重なって倒れている三人を、大回りして避けて部屋を出た。いずれも髪の毛ぼさぼさで、眼鏡かけてて、ズルズルの黒いローブを着ている。何かの新興宗教みたいにそっくりお揃いだ。
「……解剖がどうとか言って入ろうとした」
ひぃぃぃ！　やっぱりそうだったんだ、あのまま一人で寝てたら今頃私バラバラだったんだ！　何て恐ろしい所だ。こんな危険な場所で寝るよりは、アンジュを適当にあしらって追い返して、なんとか自分の部屋で寝るほうがまだマシだ。今日は絶対おうちに帰ろう。

「えっと、この人たち、どうしましょう？」
「そのうち目を覚ます」

いや、そうだろうけど。こんな危ない連中、野放しにしといていいのかなぁ、とね？　役所に突き出したほうが……って、あぁ、そんなことしたらここの所長もただでは済まないな。本人がなんと言おうが、人造人間の研究なんかしてるんだから。

手配書にでも乗ってなかったかしら、と三人の顔をもう一度眺めていると、一人が身じろぎをして眼鏡が床に落ちた。

ん～？　おやおやぁ？

「あ！　ケンジ・マツザワ！」

「知り合いか？」

「いえ、ただ……数人を相手に結婚詐欺をしたとかで、２年前に国外追放された人です」

とんでもなく美形なジゴロだったはずだ。目を合わせると腰が砕けるとかなんとか。それがまぁ、なんという姿に……。

せっかくなので残り二人の眼鏡もリンドウに取ってもらう。

「マサト・ナカガワは貴族の女性に対する暴言の罪で王立研究所から追い出されました。アキラ・キクチはある歌姫に熱狂的な手紙を送り続け、彼女を精神的に追い詰めた罪で歌劇場への出入りを禁じられた人です」

いずれも、そのままの姿では行動しにくくなって、こんな姿でコソコソ生きてたんだろうなぁ。解剖したがってたのはおそらくナカガワだろう。人体構造学を専攻していたから。

「捕まえた方がいいのか？」

「それには及ばない」

そーですね、とりあえず捕まえちゃいましょう、と言おうと思ったのだが、タキガワ所長に遮られてしまった。

「そんなでも優秀な助手たちだからな。昨夜は客人の事を伝え忘れ

たから、勘違いしたんだろう。済まんな」
ちっとも申し訳なさそうじゃないけど、客人じゃなかったら良いのか、というツッコミを飲み込んで、私は頷いた。そうだよね、後ろ暗い事を担当する人たちも、こういう世界にはきっと必要なんだろうね、あはは。

というわけで、私とリンドウはなんとか無事に恐怖の屋敷から脱出したのである。やれやれ。

気力を振り絞って出勤すると、そこは何故か４人の男女による愛憎劇場と化していた。あくびをかみ殺しながらどこかの民芸品みたいに首をこくこく振っていたアヤメおねーさんに状況を聞くと、どうやらうちで販売した目薬に混入した惚れ薬が起こした悲劇というか喜劇らしい、ということが判明した。……何故混入したんだ？

とりあえず見たところ、シズカ・ナツメをヒサシ・スズキとアキヒロ・ホウジョウが取り合っていて、フミカ・タツミが怒り狂っているらしいことが分かった。……この４人はたしか、仲良しだとばかり思っていたんだけどなぁ。タツミとホウジョウがもうすぐ結婚する予定で、ナツメとスズキはそれぞれの付き添い人をするはずじゃなかったか？　何をどうしたらこんな事になるのだろう。

とりあえずタツミは今すぐ二人に解毒薬を飲ませろと言うし、ナツメはホウジョウにだけは解毒薬を使うなと言うし。……あれ、じゃぁスズキにはとりあえず解毒薬を出していいのかな？　ロジックパズルだとそういうことになるよね。

私の護衛が終わって帰ろうとしていたリンドウを呼び止めスズキをおさえつけてもらい、ナツメに恋心を語り続けるその口の中に解毒薬を流し込んだ。は、お代の交渉するの忘れてた。だってタツミ

のヒステリーがひどくて、早くお引取りいただきたくなったので、つい。

まぁとりあえずスズキが正気に戻ればもうちょっと事情が見えてくるだろう、多分。流し込んだ解毒薬が気管に入ったのか、ものすごく苦しそうにむせているスズキを、リンドウがなおも抑えている。いやいや、もう良いから。楽な姿勢とらせてあげて！　案外融通きかんな。

「ゲフっ、ごほ、ごほっ！　お、俺は一体、何を……！」

効果覿面だなぁ。こんなに即効性の高い薬って、実はキケンなんじゃないかなぁ。私が飲むわけじゃないから良いけど。とりあえずホウジョウにも投与してこの騒ぎを収めたいんだけど、どうですかね？

「だめよ、だめ！　アキヒロはやっと私のものになったのよ！　誰にも渡さないわ」

「アキヒロは私と結婚するの！　なによ、友達面して、ずっと狙っていたのね！　この卑怯者！」

しゅ、修羅場だ……。てゆーか、取り合うほどいい男かぁ？　コレ。（失礼）

「フミカ！　そんな男の事はもう忘れるんだ。俺が……俺がいるから！　俺のほうが、君をあいしてるんだ！」

「本当？」

……なんだこれ。なにこのぐだぐだ。おかしいなぁ、なんでこんな、安直、な……。

「アレ？」

顔の上に何か乗っている。なんだっけ？　あー、えっと、そうだ、本だ。『夏の夜の夢』だ。なるほど、最後のシーンはこれの影響か

ぁ。え、じゃぁ私の役割ってパック？　オベロンさま？　えー。
そういえば眠りに落ちる寸前、あの４人の関係と似てるようなそうでもないような、とりあえず薬の力でうまくペアになりましたってそいつぁハッピーエンドとは言ってはいけないような、とか、考えてた気がする。

しかしまぁ、目が覚めてよかった。手術室で寝たあと、そのまま起きなかったから今度こそ夢と現実で反転しちゃう所だったのかもしれない。いやぁ危ない危ない。っていうか、起きてるんだよね？
こっちが現実なんだよね？
なんだかなぁ、と思いながら、本を閉じてアプリを立ち上げる。
……今夜中にクリアして、とりあえずこの夢を封印だ！

小さな画面の中で、ドット絵の勇者様が「まかせとけ！」と拳を振り上げた。
がんばるのよ。私は小さな声で応援して、『魔王の間』へと彼らを送り込んだのであった。

Ｔｈｅ　Ｅｎｄ…？

そんな彼女達の日常。（拍手お礼加筆＋１）

くるみちゃん。

「おっはよー、りょーちゃん、あきちゃん！」

「おー、おはよー」

「おはよう、くるみ」

瀬名さんは、毎朝とても元気だ。まぁ瀬名さんに限らず魔女っ娘組はみんな元気だ。溌溂としている。高校生らしくていいよね。健康的で。

私はといえば、早起きはできるけれど低血圧気味で、朝はどうしてもテンションが低い。毎日「朝なんか来なければいいのに……」なんて思うくらい、弱い。日光にも弱い。溶けそうになる。（ヴァンパイアであるはずの貫井さんが無遅刻無欠席なのはどういう仕組みなんだろう？）

だからあんな風にガラっと勢い良く扉を開けて、大音量でご挨拶できる瀬名さんに感動する。眠気覚ましにもなるし。それに、彼女はなかなか面白い事を大声で言ってくれるものだから、聞いているだけで楽しい。（盗み聞きじゃないよ、教室内で大音量で言うんだもの！）

どうやら昨夜、臨時でお小遣いをもらってかなり浮かれているようだ。うんうん、よかったねぇ。３千円は結構大きいよね。週末にはきっと大好きなパーラーのイチゴパフェに変わるんだろうけど。

……アレ食べると、向こう一ヶ月は苺の顔なんか見たくもない、という気分になるんだけどなぁ、私は。

彼女は「じゃじゃーん！」と言いながらわざわざそのお小遣いを、お財布から取り出して喜んでいる。……ほんと元気だなぁ。そんな瀬名さんを後ろの席からぼーっと観察していると、突然彼女が「あれぇぇ？」と叫んだ。

「ど、どうしよう、りょーちゃん！　これ、このお札変だよ！」
「ん、どーしたぁ？」
「千円札！　なんか、一枚だけ変なの！　どうしよう、ニセモノなのかなぁ？」

瀬名さんは半泣きだ。あのイチゴパフェ、二千五百円もするからなぁ。一枚ニセモノだと食べられないもんね、かわいそうに。いや、でも一目でわかる偽札ってどうなのよ？　そもそも、渡された時点で気が付いておこうよ、そこは。

「くるみったら……。それはね、古いお札なのよ」
……あぁ、なるほど。夏目さんが混じってましたか。
だよね！　そんな簡単に素人が偽札なんて判別できるものじゃないよね！　最近のはすごく精巧にできてて、見ただけじゃわからないっていうもの。
いやぁ、魔女っ娘にはそんな機能も付いていたのかと考えちゃったよ。

まぁ、お札の人物が代わったのは結構昔の事だから、古いほうを覚えてないのも仕方ない、かなぁ。
や、でもさ、代わったばっかりの時、野口さんの髪型があんまりショッキングだっていうんで、アレを隠すために折り紙するのがはやったよね？　ターバンっぽくしたり、色々。テレビでもよく流れてたんだけどなぁ。

「えー、そうなのぉ？」
瀬名さんはきょとん、としてじーっと手元のお札を眺めると、言った。
「パーマかける前の方がかっこいいよね。どうして髪型変えたんだろう？　イメチェン？」
ぶはっ、と、教室内にいる数人が堪えきれずにふき出した。私以外にも、けっこう瀬名さん観察マニアがいたんだな。
でも、まだまだだね。あくまでも観察している事を悟られず、密かに楽しんでこそ、だよ、人間観察の醍醐味というものは。（ふふん）

「くるみ、その人は夏目　漱石さんといって……」
氷見さんが遠慮なくお腹を抱えて机をバシバシたたきながら笑っている横で、由良さんが「坊ちゃん」の解説をし始める。

私は一人、震える腹筋と戦いながら、うつむいて本を読むふりをした。今日も楽しい一日の始まりをありがとう、瀬名さん！　でも実はちょっとお腹痛い。辛い。おおっぴらにウケている氷見さんが羨ましい。
そんな、日常。

ななえちゃん。

水橋さんは、小動物のような子だ。愛でたい。私より2ミリほど身長が低い所もいい。……いやほら、自分より小さい子のほうがかわいく感じるじゃないか？
小さいって言ったら桂木さんがダントツなんだけど、彼女とはまぁ、ほら、色々あったしね……。（ふ）

とにかく、水橋さんの、ぽんぽんはねるあのポニーテールがかわいらしい。うさぎさんみたいで。

しかし、こんな隠れ水橋ファンの私にも、どうしても理解しがたいというか許せないというか、そういう一面を、彼女は持っている。

「うわぁ、なにこれ、可愛い！」

現在彼女が手に持ってはしゃいでいるのは、ゾンビをモチーフにしたぬいぐるみである。目が片方バネで飛び出す仕組みになっていて、お腹の中も入れ替えて遊べるようになっている、らしい。

はっきり言おう、グロい！

はしゃぐ彼女のバッグや携帯には、ガイコツのほうがまだマシだ、と言いたくなるような謎の人形がたくさんぶら下がっている。なにあれ、ブードゥかなんか？

あのさぁ、その不気味グッズの収集癖、なんとかならんかなぁ！

だから男の子が引いちゃうんだよ？　「水橋さんは、可愛いんだけど……」の「けど」の部分に引っかかってるのがそこなんだよ？

彼女にかかれば、生物室の人体模型君でさえかわいい事になってしまう。「いくらなんでもリアルに作りすぎではないか？」「きもちわるい」「夢に出てうなされた」「夜、トイレに行けなくなった」という苦情が絶えない、あの不気味な「いくおくん（通称）」が！

私でさえ、一度夢でいくおくんに追っかけられて以来（多分ゲームの影響）、彼とは目を合わせられないってのに。

根岸さんの話によると、水橋さんの自宅のお部屋は大変なホラールームと化しているらしい。蝋人形館もかくやというほどの不気味さで、流石の根岸さんも早々に退出したそうだ。

「古い探偵モノの密室殺人事件の現場になりそうだった」って。

……み、見てみたい！　ような気もする。（でもこわい）

まぁ、そんな彼女にだってアプローチするつわものはちゃんといるわけで。だってかわいいもんね。趣味がちょっと怖いだけで。

「良かった！　これなら気に入ってくれると思ってたんだ！」

確かあれは三つ向こうのクラスのテニス部員だな。わざわざ教室まで来てプレゼント渡さなくても、放課後でいいじゃん？　……会いに来る口実なのかな。健気だなぁ。（けっ）

「この前のはちょっと微妙だったからさ。埋め合わせ」

「えー、そんなぁ。この前のだって結構かわいかったよぅ。首がカクンってなって。中に入ってたキャンディーもおいしかったし」

彼女にあの地獄の使者みたいな犬のキャンディーボックス送った犯人はキサマかぁぁ！

教室入った途端目に入る位置に設置されていて、あやうく私の心臓が口から飛び出すところだったんだぞ！

にっこり笑った彼女から「おひとつどうぞ」とおすそ分けされたキャンディーは、何故か肉のこびりついた骨の形をしていた。ちなみに味は、ミルク。肉の部分は多分ラズベリー。（食べたともさ！）

しかし、そうやって毎度毎度毎度毎度、しっつこいほどに不気味グッズを見つけてきては貢ぐ彼に、はたして春は来るのだろうか？

水橋さんは鈍そうだからなぁ。あんな風に遠まわしにアピールするくらいじゃ、一生気付かないんだろうなぁ。

今のところ、「趣味が合う、いいオトモダチ」としか認識されてないよ、絶対。

とりあえず、これ以上コレクションを増やさぬうちに玉砕なり何なりしてほしい、と思う。

そんな、日常。

りょーこちゃん

氷見さんは、楽天的な子だ。いつ見てもなんだか笑っているし、自称「ヒマワリっぽい」青井さんよりもずぅっとヒマワリらしい子だ。背も高いし。

大抵の事は笑って流してしまえるようで、例えば瀬名さんが二年間もCDを返してくれなかったり、由良さんが無造作に（あの謎の怪力で）振り回した腕が顔に当たったとしても、「あはははぁ。どんまい！」なんて言って許してしまう。

そう、彼女はほぼ一年中、笑顔を絶やさないすごい人なのだ。しょっちゅうつまらんことでわが身の不幸を思い返しては落ち込んでいる私にとって、尊敬に値する対象と言ってもいい。

が、今の彼女はどうだ？

真剣な顔で口をきゅっと引き結び、瞳孔は開き気味。左右の家の塀に交互にはりつきながら、カニ歩きをしている。い、一体何が？

何があるというの？

「盛沢さん、だいじょぶだよ。りょーちゃんは、いつもこうなの」

瀬名さんがにぱーっと笑って私に言った。

珍しく氷見さんのおうちにお邪魔する事になった道すがら、それまで笑顔で軽口を叩き合っていた彼女が唐突に黙り込み、敵地に潜入する兵士のごとき真剣さをかもし出しているのに「いつもこう」とはこれいかに？

「この近くにはね、良子の天敵が潜んでいるのよ……」
由良さんも、ふっと遠くを見るような目で、立ち止まってしまった私の背中をそっと押した。……ナニ、一体。

「きたっ！　ヤツだっ！」
氷見さんがぴくりと耳を震わせたかと思うと、一目散に近くの電信柱にしがみついた。
そのまま手馴れた動きでよじ登り、その辺のお宅の塀に乗り移る。忍者かっ！　てゆーか完全にキャラが変わってはいませんか？

「なに、なんなの？　だれ？」
氷見さんの警戒っぷりに比べ、あとの二人の平和そのものの表情はなんなんだろう。キケンなの？　そうでもないの？　ってゆーか、私も逃げるべき？
「りょーちゃんには、キケンなの」
「盛沢さんも大丈夫よ、きっと」

やがて四つ角の右の方から、ばふっ、ばふっ、という、大型犬独特の息遣いが聞こえてきた。駆け足でこちらへやってくる気配。じゃらじゃら、という鎖を引きずる音からして、もしかしなくても脱走してきた？

犬は急ブレーキの勢いで角を曲がったかと思うと、更に勢いを増してこちらに走ってくる。ぎゃー、ちょっと怖い！　うちのご近所のアンドレとは違う。ええと、ナポリタンマスチフとか、そういうの？　こんな犬、この日本でどうやって飼ってるのって大きさだ。

犬は、私や瀬名さん、由良さんには目もくれず、塀の上の氷見さんへ飛び掛った。が、氷見さんにとっては幸いな事に、犬にとって

は残念な事に、あと一歩という所で届かない。
それでも彼（？）は果敢にチャレンジを繰り返す。
残像が見えるほど尻尾を振っているという事は、あれは喜んでいるんだろう。敵意ゆえではない。彼女に対する溢れんばかりの好意が見て取れる。

氷見さんは怯えて、更に逃れるべく塀の中の木に登ろうと手を伸ばした。あ、あれ柿の木だ！　折れやすいって噂の柿の木だよ、やめとけって。

結局、騒ぎに気付いたご近所の皆様が駆けつけて犬をなだめ、押さえつけて、氷見さんが救助されるまで３０分も掛かった。
にもかかわらず、「今日は早くおわってよかったねぇ」なんていう、見物客の暢気なセリフが聞こえてきた。え、コレ毎回やってんの？

氷見さんは「先に帰ってるからあああぁぁぁぁ」と叫びながら、オリンピックでメダルが取れそうなスピードで走り去る。犬が悲しそうに「わううぅ～」と鳴いた。

一方通行の愛。これもまた、日常のこと。らしい。

けせらんさまとわたし。（拍手お礼＋α）

本格的な引越しを翌日に控えた、春休みのある日のこと。
お風呂上りでホカホカしながら部屋に戻ると、侵入者が待ちかまえていた。

「金を出せ、なう！」
え、カツアゲ？　それとも強盗？　（あれ、そういえばこの二つってどう違うの？）

不法侵入されて、刃物なんかよりもよほど物騒な棒（これ一つで5人戦隊をこき使い、都合の悪い目撃者を気絶させ、記憶を消し、敵対する宇宙人を捕縛しているわけだから間違いなく凶器だ）を心臓に向けられて金品を要求されているこの状況は、強盗だよね？
たしかケセラン様って、地球の平和を守りに来た宇宙警察だったよねぇ？　なんで平気でこういう犯罪行為に手を染めちゃうの？

それにしてもこの部屋は招かれざる客を呼び寄せる機能でもついているんだろうか。吸血鬼の次は宇宙人（てゅーか毛玉）だなんて。どうしてケセラン様が単独行動してるの。こんなの野放しにしちゃダメじゃない、中山君！

とにかく状況が全くつかめないんだけど。お願い、だれか説明してええええ！

と、まぁ、心では動揺しきりだったけれど、家族を巻き込まないために一番大事な作業をした。すなわち、ドアを閉めて、鍵をかけること。

「ふぅ……」
「きいているのか、しもべの助手！　金を出せ、なう！」
ケセラン様はなかなか答えない私にじれたのか、持っている棒をぶんぶんふりまわして見せた。光景だけなら和まなくもない。白くてまるくてふわふわした物体だから。

うん、しゃべらなければ癒されるかもしれない。「まぁ、ぐずっちゃって」みたいな？
実際はそんな可愛いもんじゃないんですけどねー！　「キケン、取り扱い注意」だけどねー？

「それで、ええと、いかほどご入用ですか？」
だから、我慢よ私。確実に潰せるチャンスが巡ってくるまで、がんばろうって誓ったじゃない！　（戦隊のみんなと）
「ありったけ、なう！」
り、理不尽だあぁっ。こっちだってお小遣いをやりくりして貯めてるのに、なんだそれ。

「差し支えなければ用途と、返済の目処なんかをお聞かせ願えると、ありがたいかなぁ、なんて……アハハ」
「生意気なう。まったく、しもべたちよりも使いにくいなう」
「あはは……」
あぁ、5人戦隊は言われるまま、用途も聞かず返済の期待もせずにお金をさし出しちゃったのか。可哀想に。もうちょっとガンバレ。
「しかたない、聞かせてやるなう。先日講演会で……」

毛玉はどうやら、恩師（要するにコイツがこうなった責任者ですか？）の講演会のために里帰りしていたようだ。そのまま戻ってこなければ良かったのに。
とにかくその講演会のタイトルは「現地人の上手な利用法」で、

鞭だけではなく飴も使いこなせ、と説いていたらしい。さすが、毛玉の恩師。（いろんな意味で）

「つまり、戦隊の不満を抑えるためにお給料を出す事にしたんですね」

まぁそれは悪くない考え方だと思う。けれども。

「でも、私のお小遣いにも限度というものがありまして」

それ以前に何故私がそのバイト代を支えねばならんのか。

いっそスポンサー企業でも募ればいいじゃないか。

ＣＭで「私達は、地球平和のために売り上げの３％を戦隊に寄付しています」みたいな文字を流してもらってさ。それで、戦隊の名前をつける権利なんかも競売にかけるの。どうだろう、今風でいいと思うんだけど。

「それはできないなう。あくまでも地球人には秘密裏に動けとのお達しなう」

ち。きっとコイツの上層部にも何か目論見があるんだろうけど、融通利かんなぁ。

っていうか、私は？　私地球人。戦闘員でもない地球人ですよ？

助手だから戦隊の一員みたいな扱いなんだろーか。迷惑な。

「う～ん。時給は１０円くらいですか？　だとすると、私の手持ちで、ええと……」

さすがに全額渡さなくていいよね。まぁ、返ってこなくてもギリギリ、本当にギリギリ我慢できるのは、５万くらい？　（戦隊への同情料として）

「一人当たり１０００時間雇えますけど。多分一年もちませんよ」

「オマエ、ヒドイ女なう。けちなう。今時幼稚園児のおつかいだっ

てもうちょっともらえるなう」
「えええええ！」
ケセラン様の立場に立って、ケセラン様らしい時給を考えたのに！「支払われるだけ感謝するなう！」とか言い放つに違いないと思ったのに。

いやいや、それよりもここは、「酷い」というより「非道」の代名詞みたいなケセラン様から「ヒドイ女」扱いされた事にショックを受けるべきか？

思わず動揺してしまった私は、結局言われるがままにお金を差し出してしまった。
ケセラン様は、上機嫌でぴかぴか光りながら帰って行く。くそぅ。
「……鴉にでも襲われたらいいのに」
夜の闇の中ぼうっと白く浮かび上がる後姿を、私はありったけの恨みを込めて見送った。（あ、今のセリフ聞こえてたらどうしよう）

GW明け。
大学構内で私を「ラコたん」と呼ぶ一派（あのラフティングに参加していた連中だ）をどうやって始末してやろうか、と少々荒んだ目をした私の元へ、ケセラン様がまたしても単独で尋ねてきた。

さては再び金の無心か、戦隊にバイト代が出てるなんて話も聞かないし、この前のお金はどこに消えたんだ！　どうせゲーム買い込んだんだろう。

今度は一銭たりとて取られてなるものか、と身構えた私に、彼は言った。
「返しに来たなう」
一瞬、耳を疑った。

「え、返すって、まさか、え？」

思考がきちんとまとまらない。パニック状態なんだなぁ、私。だって、あのどケチのケセラン様が、借金を踏み倒さずに、催促もされずに自主的に返しに来たなんて！

大変だ、これはきっと悪い事が起こる予兆なんだ、私の悪運も尽きちゃったんだ、だから川に流されたりしたんだ。

あぁ、今までの思い出が走馬灯のように……。

「しもべの助手ごときに借りを作ってはナメられるなう。利子もつけてやるから感謝しろなう」

むっかつくぅ。利子ったってお小遣い程度じゃないか。５万貸して、一ヶ月で千円とか。

あ、あれ、でも銀行の預金の利子より高い。かなり高い！　ケセラン様しゅげぇ！　……のか、それとも日本の銀行が酷すぎるのかは、あんまり考えたくないなぁ。

「ありがとうございます。でも、どうやって増やしたんですか？」

どうか、うちぅの超技術でコピーした偽札とかじゃありませんように。もしくは、渡したお金を前金として人を雇って、銀行を襲撃させたなんて言いませんように。

「株なう」

なるほど、シンプルでわかりやすい。

ケセラン様には、株式トレーダーの才能があったのかぁ。意外。

（だって空気読まないし、相場の動きなんて更に読めそうにないんだもん）そういや株のゲームに嵌ってるとか言ってたっけ。ってことはゲームも無駄にはならなかったんだなぁ。

私が感心したように頷くと、ケセラン様は機嫌をよくして膨らん

だ。もふーっと。こういうところはちょっとマスコットキャラらしくてかわいい、と思ってしまうのは、私も感覚がマヒしているということなのかなぁ。

ところで株で増やすには原資が足りなかったのでは？　いくらカツアゲしたんだろう。

「しもべ3号が随分溜め込んでいたなう。それでも足りなかった分は……」

得意げに膨らんだケセラン様は長い冒険物語を語った。（ところでしもべ3号って福島君？　何やって溜め込んだの？）

「ようするに、ラスベガスに行って、酔っ払いをたぶらかして、スロットのコンピューターいじって、一山当てて、記憶を消してトンズラした、と」

「人聞きが悪いなう。フラれてヤケ酒飲んでた現地人に一夜の夢を見せてやっただけなう」

「はぁ。モノは言いようですね」

スロットのコンピューターいじるとか、この星の法律なんかはどうでもいいんですか。宇宙人だから治外法権だってことですか。

「しかし実際に株をいじってみるとむずかしかったなう。そこで各企業の回線の……」

「うわーー！」

前回と違って家の中には私と毛玉しかいない。だからこんな大声出しても大丈夫！

今、インサイダー取引よりもまずそうな秘密を聞かされるところだったよね。ふぅ、あぶない。

ケセラン様は宇宙生物だし、そうじゃなくてもどうしようもない存在だから仕方ないけど、私はこの件に関わってはイケナイね。聞

いてない、なにもキイテナイ。

「そ、それで、戦隊へのお給料って、結局どのくらい出す予定なんですか？」

「そこが問題なう！」

ケセラン様は、空気を読まないが細かい事も気にしない。よって、話を途中で遮られて、更に別な話題を振られても気にしない。よかった、単純な生物で。

「時給にすると計算が面倒なう。残業代なしの定給にするなう」

ひどっ！　と突っ込んだら、「ワタシだって２４時間勤務の定給なう！」と主張された。……そういや２４時間勤務だなぁ。ほとんど寝てるかゲームしてるか、だけど。

「一回の出動時間って、だいたいどのくらいですか？」

「２時間弱なう。まったく、無能なしもべどもなう」

つまりケセラン様は、本来ならもっと効率よく捕まえられるはずなのに、５人戦隊が地上の建物への影響を考慮したりとか、捕獲対象が語る事情に同情したりとか、劣悪な環境におくと途端に動きが鈍るヤワな身体とかのせいで、無駄に時間が掛かっている、とお怒りなのだ。

……よかった、私、しもべの助手で！　秘密基地の管理人でよかったあああ！

「つまり、一時間もあれば本来は十分なう。あとは連中の無能さが悪いなう」

というわけで、一時間あたりの時給の平均でいい、と主張するケセラン様をなだめてすかして持ち上げて、何とか一回の出動につき、一人１１００円まで引き上げた。

本当は１２００円までなんとか上げようとがんばったんだよ、みんな……。

いずれ会社を立ち上げて、お前らみんな雇ってやると豪語していたけど……私はもっとまっとうなところにお勤めできるよう、努力しよう。でも時代は就職難だからなぁ。（ごにょごにょ）

いざとなったらケセラン様の会社の会計監査役とか、案外いいかもなぁ。

みんなのお給料が１２００円まで上がらなかった理由は、秘密基地のお家賃をそこから差し引く形になったからだ、という事は……けせらんさまとわたしだけの、秘密ということで。

お茶菓子のグレード上げるから、許してね。

けせらんさまとわたし。（拍手お礼＋α）（後書き）

ケセラン様はあくまでも「株」にこだわっている模様です。
スロットいじりまくって稼いだ方が手っ取り早いような気もしますが……。

電車の風景（拍手お礼＋１）

そのいち。

小・中・高と、徒歩で通学をしていた。幼稚園はたしか、バス？　そんなわけで、私は大学生にしてようやく電車通学デビューを果たしたのである。（別に嬉しいわけじゃないんだからねっ？　なんだか大人になった気分、なんて思ってないんだからねっ）

ラッシュアワーというのは聞きしに勝る恐ろしさだなぁ。私が腕をちょっと動かすだけで、首をぐるっと回して（あの首、頑張れば１８０度くらい回るんじゃないの？）睨みつけてくる美人さんもいて、怖い。

ゆ、指一本動かしちゃなんねぇ、と思わせるような殺気だった。う～ん、よほど痴漢被害に遭ってるんだろうなぁ。でなきゃあそこまでの殺気は出るまい。

でも私、ストレートなので！　綺麗なお姉さんを見るのは目の保養だとは思いますが、それ以上の興味はないので！

そんな彼女は自分が動く分には問題ないと思っていらっしゃるようで、この恐ろしい混雑の中、お化粧の仕上げをする習慣があるらしい。

その手際たるや大したもので、そりゃぁもう巧みに、前に立つ人の背中を利用する。例えば鏡を乗せたり、お化粧ポーチを挟んだり。主な被害者はおとなしそうな会社員さん達だ。

背中の高さと広さが丁度いいんだろうなぁ。「背広」というくらいだし。

でも流石に抗議していいと思いますよ？　戦闘服ともいえるスーツをそんな風に扱われちゃって、いくらなんでも我慢しすぎだよ、がんばれ！　もっとがんばれ！　と、ついつい応援したくなっちゃうほど、みなさんおとなしい。なぜだ。

ちょっと離れた所に立っている私のところにもパウダーやらお化粧品の匂いやらが容赦なく降りかかる。きぃぃ、誰か、誰かこの人にマナーってものを教えてあげて！

と、憤っていたある日のこと。

今日もお化粧絶好調ですなぁ、そしてみなさん相変わらず辛抱強いですなぁ、と観察しながらぼーっと立っていた私は、突然の揺れに対応できなかった。

だって、電車に不慣れなんだもん。大体、電車って揺れるポイントが決まってるもんじゃないの？　イレギュラーなところで揺れるからこんなことに！

勝手な言いわけやら愚痴やらを心の中でこぼしながら、私はよろめいて、前の人の背中にぶつかった。

ただでさえ大きく揺れて必死で耐えていた所に、私の全力の体当たり（わざとじゃないんです、ごめんなさいごめんなさい！）を喰らったその人もよろめいて、後は車内にその連鎖が広まって行く。あわわわわ、えらいこっちゃ！

車両の半分くらいの人を巻き込みながら、それは収束した。と同時に、電車も止まる。

ひぃぃ、早く駅について！　次の駅で降りるから！　元凶が私だってわかっている周りの皆さんの白い目から一刻も早く逃げたいから！

おそるおそる顔を上げて周りの人々の様子をうかがう。しかし、誰一人としてこちらを睨んだりしていなかった。アレ、だいじょぶかな？　こういうのってもしかして日常茶飯事で、いちいち目くじらを立てたりしないものだったりするのかな？

ほっと息を吐き出して、次は気をつけよう、と手すりにしがみついた私の耳に、「あっ」という小さな声が届いた。

男の人の声だ。

なんだろう、とそちらに目をやると、あのお化粧美人さんが左手で鼻をおさえていた。手の隙間から、赤いものが見える。

やば、今のでぶつけて鼻血でも出しちゃったかな？

うわー、どうしよう。ティッシュはどこにいれてたかなぁ、と鞄の中身を思い出そうとした私は、もう一つ、彼女の右手に赤いものを見つけた。それは……根元からポッキリ折れた、ルージュ。

な、なんということ！　彼女のお美しいお鼻には、ルージュがつまっているのか！

彼女の周りの人達は、不自然なほどうつむいてひくひく痙攣している。たぶん、さっき声を上げたのはあの中の一人なんだろう。

視線が集まる中、彼女は左手は顔に当てたまま、右手でポーチからハンカチを引きずり出した。そして、さっとそのハンカチで鼻から下を覆った。そして必死で鼻に詰まってしまったものをかきだす。……うん、なんていうか、ゴメン。

やがて「安全の確認ができましたので、出発します」みたいなアナウンスが流れて、電車はゆっくり動き出した。

人々は、不自然にうつむいたまま。

次の駅に着くと、彼女は周りの人々を突き飛ばすようにして電車から降りた。もう二度と、彼女がこの車両に乗ることはあるまいな、と思いながら私はその背中を見送る。

ついでに、二度と満員電車で立ったままお化粧なんてしないほうがいいよ。絶対。

「神様って、見てるんですねぇ」

誰かがポツリと呟いて、車内の人々は頷いた。

私が電車を降りる際に、周りから小さく拍手が聞こえたのは、あくまでもキノセイ。ということにしておく。

そのに。

帰りの電車は、朝ほど混んでいない。だから周りを観察する余裕がいつもよりあるわけで、おかげでいろんな変わった人や物を見た。こんな短期間にな！

今日はうつろな目で等身大のお人形に何か話しかけている人が隣に座ったりしませんように、イヤホンの意味がないほど音洩れしている音楽に合わせながらエアギターしてる人が目の前に立ったりしませんように、とお祈りしながらそっと乗り込むと、いきなり気になるセリフが耳に飛び込んできた。

「オレさぁ、グ～ペンに似てるじゃん？」

なんですと？

似てるじゃん、なんて同意を求められたらそちらを見ないわけに

はいかない。グ〜ペンと言ったらある意味スターだ。いわゆるユルキャラ。

なんでもグータラ星からやってきたペンギン、なのだそうだ。のっぺりとした愛嬌のある顔立ちの、ピンク色のペンギンさん。いつも眠そうに、まぶたを半分閉じていて、代わりにタラコのようなくちばしをぱかーっと開いている。

そーっと、声のほうに身体ごと向ける。なにげな〜く、さりげな〜く。

そこには確かに、擬人化されたグ〜ペンがいた。お友達に囲まれて。

「このまえさぁ、ユーコちゃんがさぁ……」

グ〜ペンがダイエットしたら、なるほどあんな感じになるかもしれないなぁ。

愛嬌のあるお顔だと思うよ？

彼はどうやらユーコちゃんとやらに気があるのだが、その彼女からいきなり「グ〜ペン好きでしょ？」としつこく迫られたようだ。

「で、オレは言ったわけ。オレは確かにグ〜ペンに似てるかもしんないけど、好きだから似てるわけじゃないんだって。そしたらさぁ……」

彼はゴソゴソ、とバッグを探ると、中から水色のぬいぐるみを取り出した。

「これくれたんだ……」

それは、ネムカパという、グ〜ペンの相棒のぬいぐるみであった。

えーっと、つまり水色のカッパだ。「かぱかぱ〜」という寝言しか言わない。いつもグ〜ペンの頭で寝ているか、でなければ小脇に

抱えられている。

「あれだけグ～ペン好きでしょって言って、これはなぁ」

……うん。そりゃぁないぜ、ユーコちゃん。なんか足りない、って思ったのかもしれないけどさぁ。

周りのお友達は必死になって慰めようとしている。いわく、グ～ペンは女子高生にも大人気。グ～ペンは主婦にも人気。グ～ペンのアニバーサリー仕様の人形にはマニアが数十万の値段をつけた、などなど。

みんな、グ～ペンじゃなくて本人のフォローしてあげなよ。

私は心の中で突っ込みながら、目的地で電車を降りた。

……そうだ、夕食はタラコスパゲッティーにしよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3420r/

脇役の分際　ぷらす。

2011年9月30日21時20分発行